

令和 7 年度

静教研 小規模研究部 研究まとめ

1 静教研夏季研究大会

(1) 実践報告：静岡市立梅ヶ島小中学校

(2) 実践報告：島田市立川根小学校

2 静教研研究冊子

静岡市立清水浜田小学校

3 全国へき地教育研究大会新潟大会参加報告

4 全国へき地連盟HP寄稿

(1) 南伊豆町立南上小学校

5 講演資料

守口市教育委員会事務局 教育部

学校教育課 前馬彰策 氏



1 学校紹介

静岡市立梅ヶ島小中学校
へき地3級
小規模特設校
全校児童生徒14名
小学生：5名、中学生：9名
教職員数13名

明治4年
前身となる梅ヶ島学会設立
創立150年以上の歴史ある学校
平成29年 小中一貫校化
令和2年 コミュニティスクール

2 児童生徒の実態と学校が抱える課題

児童生徒の実態

- ・素直さ、やさしさをもつ子が多い。
- ・地域の方や小中学生間でのコミュニケーションを好む。
- ・主体性が弱い。大人からの援助を待つ姿勢。
- ・表現力が乏しい。オフシヤルな場での発表が苦手。
- ・外部の人材とのコミュニケーションに消極的。
- ・自己肯定感が低い。
- ・切磋琢磨する環境に乏しいため、学力向上への意識が低い。

3 学校教育目標と重点目標

コミュニティ・スクール コンセプト

未来の梅ヶ島を担う
「愛され」「期待され」「頼りにされる」
人材を育てる

令和2年 学校運営協議会を設置し、コンセプト設定。
コミュニティ・スクール認定

学校教育目標

未来(あす)をつよく生き抜く子ども

平成21年度より継続。「つよく」＝「助く」。
「強さ」だけでなく、「しなやかさ」を合わせもつ意味をこめる。

3 学校教育目標と重点目標

令和4・5年度 重点目標

「自分を高める」



令和6・7年度 重点目標

「気づき 考え 行動する」

4 研究の目的と方法

本校研究主題

未来をつよく生き抜く子どもの育成
～山間へき地極小規模校の強みを生かした学校経営をめざして～

全国へき地教育研究連盟 第10次長期5か年研究推進計画 研究主題

『主体的・対話的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成』
～児童生徒一人一人が他者とともに「生きる力」を伸ばす学校・学級経営と学習指導の深化・充実にめざして～

研究課題① 確かな経営理念の確立と、家庭や地域と連携した確かな学びを創る特色ある教育課程の創造と推進を図る

4 研究の目的と方法

研究主題

未来をつよく生き抜く子どもの育成
～山間へき地極小規模校の強みを生かした学校経営をめざして～

- ・山間へき地の強み...人の流動が少ないため、地域に一体感がある
- ・極小規模校の強み...少人数での話し合いにより、(子どもも、保護者も、地域の人も、教員も)一人ひとりの思いを反映できる

研究仮説

誰もが「当事者」として「主体的に」学校に関わることで、地域とともにある学校の中で「未来をつよく生き抜く子ども」を育成することができよう

4 研究の目的と方法

研究方法

①教育課程編成の工夫

教育課程編成までの過程において、児童生徒、保護者、地域のみなさん、教職員、それぞれの対話を重視する。

②校内研修の工夫

校内研修において、教職員一人一人の実践や学びを広める場を設定する。

③地域とともにある学校づくり

学校経営のあり方、学校のあり方を保護者、地域のみなさんとともに考える対話の場を設定する。

5 実践 ①教育課程の編成

教育課程編成の過程を工夫する

従来の新年度計画会議

- ① 学校アンケート
(児童生徒・保護者・教職員)
- ② 校長の経営方針
- ③ アンケートを活用しながら
各部・分掌による検討会議
- ④ 各部・分掌による提案
- ⑤ 来年度教育課程編成の決定



5 実践 ①教育課程の編成

本校の新年度計画会議

① 児童生徒による振り返り

児童生徒が階段に掲示されている1年の写真を見ながら振り返り、行事や活動について意見を書く

② 保護者同士の対話

保護者が付箋を使いながら、子どもたちにつけたい力や学校に望む役割について対話する

③ 教職員同士の対話

行事や活動後の子どもの振り返りや教職員アンケートをもとに、「コラボノート」を活用して課題を見える化する
ECRSの視点を生かした改善案を見える化する

5 実践 ①教育課程の編成

① 児童生徒による振り返り

児童生徒が階段に掲示されている1年の写真を見ながら振り返り、行事や活動について意見を書く。(主体的な学校参画)



子どもたちの声 → ECRS児童生徒アンケートの記述より

教科書通りじゃなくて少しはみ出してもいいから教科書にないオリジナルの授業にしてほしいな！



ただ教室で教科書見て覚えるじゃなくて、シュミレーションとか、実際に体験して学べることもあるよね。

先生と生徒の認識の違いを理解して欲しいな。



もっと保護者や地域の人と関わる行事を増やしても良いと思います。

小中でやる行事だったり、演奏とかそういう小中学校の良さを活かした行事などを増やしたいと思う！



もう少し中学生と交流できる活動などがあったらいいなと思う。

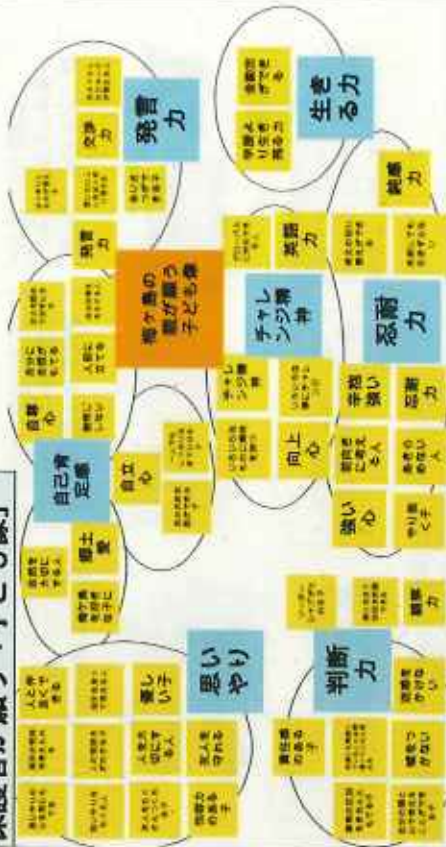
5 実践 ①教育課程の編成

②保護者同士の対話

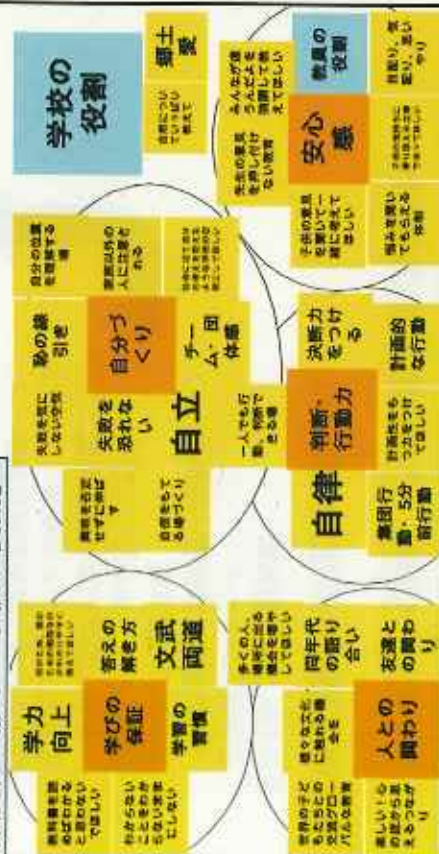
保護者が付箋を使いながら、子どもたちにつけたい力や学校に望む役割について対話する



保護者が願う「子ども像」



保護者が願う「学校の役割」

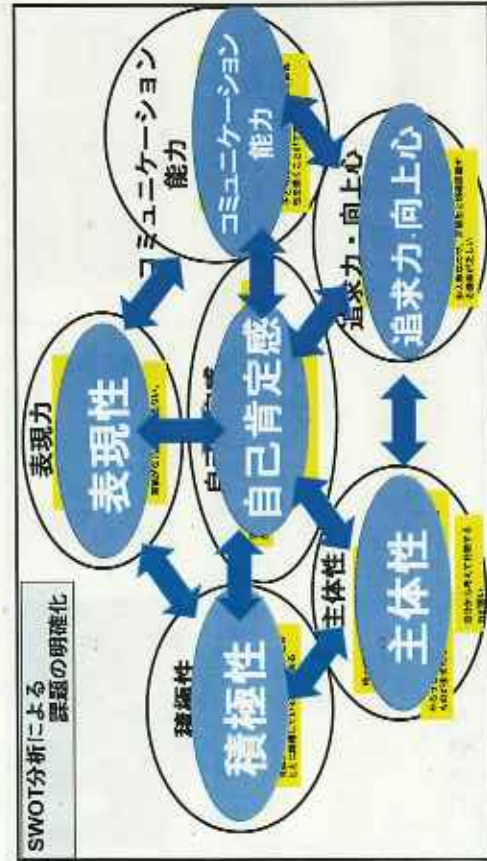
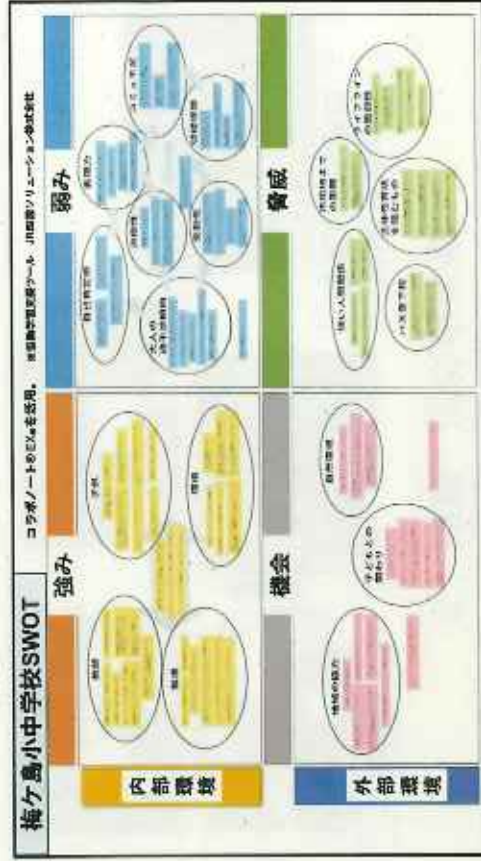
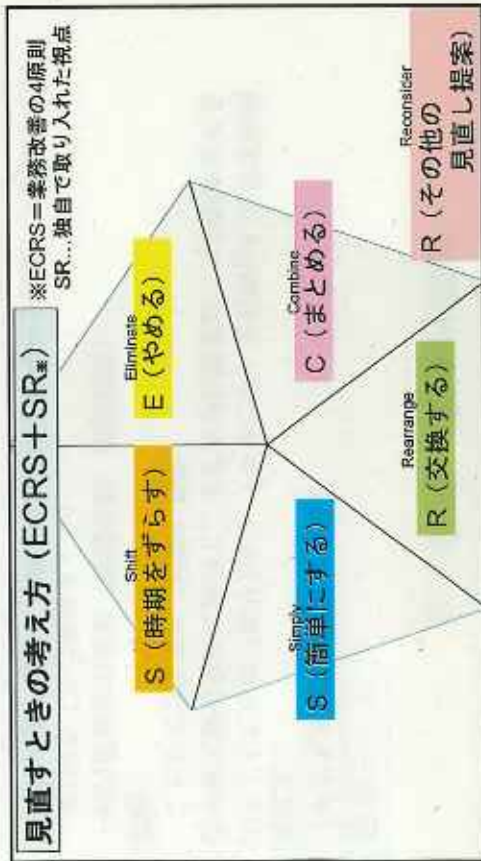


5 実践 ①教育課程の編成

③教職員同士の対話

- ・行事や活動後の子どもたちの振り返りや教職員アンケートをもとに、「コラボノート」を活用して課題を見える化する
- ・ECRSの視点を生かした改善案を見える化する
- ・SWOT分析を行い、多面的に学校の強みと弱みを見つめ、改善策に生かす





5 実践 ①教育課程の編成

- ④ ①～③を生かして校長から経営の方向性提案
どこを重視するのか、何を改善するのかについて明確化
その後の部会、全体会での議論のベクトルの方向性を明確化
- ⑤部会での対話
課題や改善案が見える化された「コラボノート」を活用しながら
2つのグループで提案内容を検討。2つのグループにそれぞれ所属
する分掌長がイニシアチブを取りながら進める。
- ⑥全体会での対話
提案がゴールにならないように、全体会でも質問、意見を積極的に
行いながら、検討・修正。



5 実践 ②校内研修

研修テーマ

「子ども主体の授業をつくる」

手立て

- ①子どもたちの「知りたい」「やりたい」を言語化した学習問題
- ②学習問題の解決に向けて、子どもが計画を立てて学びを進めることができる単元（授業）展開

実践

- ・校内研修会の充実（実践公開、講師招聘）
- ・週1回の「ミニ研修タイム」
- ・近隣の権小規模校との合同研修会とリモート授業、大規模校交流

5 実践 ②校内研修

研究授業



市内・県外での 授業研究会参加



5 实践 ②校内研修

フォークスするテーマ
学習問題の解決に向けて、子どもが計画を立てて学びを進めることができる単元

氏名	役職等	経歴	所属団体
1	代表	・ 坂本修治 ・ 春日井市立藤山台中学校 ・ 情報支援担当委員	・ 坂本修治 ・ 情報支援担当委員
2	委員	・ 春日井市立藤山台中学校 ・ 臨時委員	春日井市立藤山台中学校 臨時委員会

物理·講師 岐阜聖徳学園大学 天置先生

打合せ後に「誤解
タイム」を設定。
クロムブックで共
有。リンクを貼っ
ていつでも閲覧で
きるようにした。

[illegible]

校外研修金の参加報告...本校にとって参考になる部分を中心に
自身の授業実習報告...チャレンジしている部分を具体的に

5 實踐 ②校內研修

5 実践 ②校内研修

近隣へき地校との
4校合同研修会



静岡大学 中村とも元 准教授

5 実践 ②校内研修

近隣へき地校との
交流授業



近隣大規模校との
交流授業



5 実践 ③地域とともにある学校づくり

梅ヶ島	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	合計
R6	0	1	0	1	2	2	2	4	3	15
R7	0	0	1	0	1	2	2	2	4	12
R8	0	0	0	1	0	1	2	2	2	8
R9	0	0	0	0	1	0	1	2	2	6
R10	0	0	0	0	0	1	0	1	2	4
R11	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
R12	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
R13	児童生徒数の推移									
				0	0	0	0	0	0	1

5 実践 ③地域とともにある学校づくり

「梅ヶ島小中学校の在り方協議会」の立ち上げ

- 第1回 令和5年7月19日 PTA（保護者 校長 教頭）
静岡市教育委員会教育局長 教育総務課教育政策係長
テーマ「梅ヶ島の子にどんな力をつけたいか」
- 第2回 令和5年11月1日 PTA（保護者 校長 教頭）
テーマ「学校の役割とは」
- 第3回 令和5年11月29日 PTA会長 連町会長 校長 教頭
テーマ「住民アンケートの実施について」
- 第4回 令和5年12月7日 学校運営協議会委員
テーマ「今後の学校の在り方について」

5 実践 ③地域とともにある学校づくり

第1回「梅ヶ島小中学校の在り方協議会」の様子



付箋を使い、思いの
見える化、共有化

5 実践 ③地域とともにある学校づくり

第2回「梅ヶ島小中学校の在り方協議会」の様子



付箋を使い、思いの見える化、共有化

5 実践 ③地域とともにある学校づくり

梅ヶ島地区住民へのアンケート 令和5年12月～令和6年1月
住民の81%の回答 統合必要86% 不要3%

第5回 令和6年3月12日 PTA、連合町内会
テーマ「今後の学校の在り方について」

第6回 令和6年4月16日 PTA、連合町内会

第7回 令和6年5月22日 PTA、連合町内会

第8回 令和6年9月26日 PTA、拡大連合町内会
静岡市教育委員会教育局長 教育総務課長 教育政策係長

令和6年12月19日 連合町内会長・PTA会長が統合に関する要望書を市長、教育長に提出

令和8年度 編入統合へ

静岡市立梅ヶ島小中学校

約 13 km 南下
令和6年12月19日 統廃合の要望書提出
令和7年3月4日 統廃合が決定
令和8年3月31日閉校予定
令和8年4月1日 大河内小中学校と統合へ

静岡市立大河内小中学校

「子どもたちの育ち」に軸足を置いた「学校の伴走」



視点を広げる議論形態の提案

議題別出席者数	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	合計
R8	0	1	0	1	2	2	2	4	3	15
梅ヶ島	0	1	0	1	2	2	2	4	3	15
大河内	2	2	2	2	3	3	3	2	2	24
玉川	3	0	3	2	1	2	2	4	3	20
	5	3	5	5	6	7	7	10	8	69

考える視点を交える資料提供

議題別出席者数	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	合計
R8	0	1	0	1	2	2	2	4	3	15
梅ヶ島	0	1	0	1	2	2	2	4	3	15
大河内	2	2	2	2	3	3	3	2	2	24
玉川	3	0	3	2	1	2	2	4	3	20
	5	3	5	5	6	7	7	10	8	69

「閉校」という貴重な機会を活かして



児童生徒からの発案
・梅ヶ島をPRしたい！
・文化祭、お祭りみたいな
してみたい！



閉校記念行事に提案
・児童生徒からの
プレゼンテーション



**探究学習との
コラボ**

この機会を子どもたちの「主体性」「表現力」を伸ばし、
「郷土愛」を高める機会にする

「閉校」という貴重な機会を活かして



牛蒡コンピン看板作成



**梅ヶ島小中跡地
記念看板作成**



マスメディアとのコラボ
・静岡朝日テレビ
・BS-TBS ・スポニチ

「社会貢献」「地域貢献」への「達成感」から、
「自己有用感」「自己肯定感」を高める機会にする

6 成果と課題

【課題】

- ①最終年度の取組の成果を活かし、かつ課題を克服するため
に今後どのように統合校と連携を取りつつ、来年度の教育課
程を組んでいくかが大きな課題となる。
- ②極少人数の中で表現力を高め、協働的な学びを促進するた
めの場の設定や工夫が望まれている。
- ③閉校まで残り8か月で子どもたちに達成感や満足感を味わ
わせ、自信をもたせた上で来年度を迎えられるよう教職員の
「伴走力」が問われる。

6 成果と課題

【成果】

- ①慣例にとらわれず、子どもたちにどんな力をつけたいかを明確
にした行事や活動に再編成することにより、ゆとりある生活の中
でじっくりと学べる教育課程を創り上げることができた。
- ②道半ばではあるが、本校の教育課題を共有し、絶えず授業研究
を繰り返す中で、教員の授業改善が進み、子どもたちの主体的な
学びを促進する授業を増やすことができた。
- ③子どもたちの育ちを第一に考え、学校の在り方について保護
者・地域の協議を促進し、方向性を導き出すことができた。

研究テーマ（本校）

たくましく未来を切り拓き、よりよい地域社会を創造しようとする子の育成
～主体性の高まりと地域愛の深まりをめざして～

1 川根地区と川根小学校の紹介

(1) 川根地区

川根地区は、北部に位置し、大井川の河川上流に広がる市街地とそれを取り巻く山間地の茶畑、桜、山林からなっている。川根地区全体は、少子高齢化、人口の流出が問題で、減少する児童数に危機感を感じている。地域の方々は、教育に関心が高く協力的である。

(2) 川根小学校

平成19年度、笹間小学校と統合したことにより旧川根町全体が学区となり、全校児童の20%ほどがスクールバスを利用して通学している。現在の全校児童数は101人、本年度入学児童数は10人で、さらなる小規模校化が顕著である。子どもたちは、明るく素直で、異学年の仲も良い。地域に対する関心は高く、川根を大事に思う子が多い。学校評価アンケート等の結果を見ると、自己肯定感は比較的低い傾向にある。地域に密着した、川根小独自の教育活動を進めている。

2 研究テーマ設定の理由

本校がある川根地区は島田市内で唯一の「小学校」中学校の学区であり、近隣の保育園も1園のみである。そのため、多くの子どもたちは12年間同じ学級集団で過ごしている。概ね落ち着いた集団生活を送っているが、人間関係の固定化や新たな挑戦を避けるという傾向が見られる。また、入学児童の減少が続いており、小規模校化が加速している。これらの状況は、主体性や多様性、創造性が求められる未来社会を生き抜く上で、また、未来の地域創造者へと成長していく上で課題となると考えている。

地域の教育への関心は高く、学校に対して協力的である。子どもたちを「川根の宝」と考え、将来の川根地区の担い手として期待し、深い愛情を注いでくださっている。故に、年々減少する児童数に危機感を抱き、川根地区の行く末を案じている。

このような実情から、たくましく自らの未来を切り拓いていく人材、よりよい地域社会の創造に貢献しようとする人材を育てていくことが本校の使命ととらえ、本テーマを設定することとした。

3 研究仮説

- ①見通しをもち、自分で判断・決定・行動・振り返る学習や活動を積み重ねていくことで、子どもたちの主体性は高まる。
②川根のひと・もの・ことを活かした川根ならではの活動を展開・充実させていくことで子どもたちの地域愛は深まる。

4 研究方法

(1) 研究を推進する3つのプロジェクトの立ち上げ

全職員が子どもの主体性の高まりと地域愛の深まりを意識した教育活動を展開できるように3つのプロジェクトを立ち上げ、教育活動を行う。

(2) 実践の積み重ね

各プロジェクトの計画に基づいて実践を重ね、子どもの変容や成長を捉え、蓄積する。

(3) 子どもの表れと学校評価児童アンケートによるプロジェクトの進捗確認と評価・改善

7月と12月に各プロジェクトの進捗確認を行う機会を設け、取組状況や取組の成果と課題を明らかにし、プロジェクトの改善・充実につなげる。

5 研究実践

(1) プロジェクトの立ち上げ

校長の学校経営方針及び研究テーマに基づき、次の3つのプロジェクトを組織した。

	プロジェクト名	ミッション（主目的）	ビジョン（育てたい姿）
01	学びのカイゼン	一人一人の学びを大切に授業づくり（主体性の育成）	自立的な学び手
02	思いをカタチに	仲間と共に未来を創る力の育成（主体性の育成）	自分の思いを実現するために行動する子
03	地域とトモニ	川根ならではの体験的な学習・活動の推進（地域愛の育成）	川根の魅力を満喫し、川根のひと・もの・ことが好きな子

各プロジェクトリーダーが中心となり、プロジェクトにおけるミッション、ビジョン、めざす子どもの姿例、最重要目標（KGI）、KGI達成のプロセス（KFS）を明確化するとともに、KFSの進捗確認を行うための指標（KPI）を設定した。それらをまとめたプロジェクトマネジメントフレーム（右表）を作成し明示化することで、各教職員が常に手元に置き、各プロジェクトの最上位目標や目標達成に向けた重点を確認し、実践に臨めるようにした。

川越小「プロジェクトマネジメントフレーム」

「気づき・考え・行動する」→「つらい・苦しい・大変な」で成長する1年計画			
学びの力イゼン	思いのカタチ	地域とトモニ	
一人一人の学びを大切にしたい授業づくり	仲間と共に学ぶための授業	目標設定と日々の実践的な学習・活動の計画	
自己啓発学習	自分の思いを実現するための行動する	自分の思いを実現するための行動する	
KGI	KFS	KPI	

(2) 各プロジェクトにおける具体的な取組

① 「学びの力イゼン」プロジェクト

本校では、授業を通して、予測困難な社会を自分らしく歩いていく力、即ち主体的に生きる力を育むことをめざしている。令和5年度より研修の軸を自己調整型の学びづくりに移し、試行錯誤しながら自由進度学習（全体の1～2割程度）や探究的な学習（総合的な学習の時間・教科学習）を通して自立的な学び手の育成に取り組んでいる。

ア 自己調整型の学習（自由進度学習への挑戦）

子どもたちが、自ら考え判断・決定しながら学びを深めていく授業づくりを進めていく上で、単元内にAAR（【A】見通し・【A】実行・【R】振り返り）サイクルを位置づけることを教員間で共通理解し実践に臨んだ。

(ア) 【A】見通しを持って学ぶ

子どもたちの主体性を引き出すためには、単元の見通しを持たせることが重要と考えた。

そこで、どの学年においても単元のはじめに単元シートなどを使い、単元のゴールや評価規準（付きたい力）を子どもたちと共有するようにした。また、1時間の授業のはじめにも、その時間の目標や学習内容を見通す機会を設定した。単元シート作成に当たっては、次の視点を参考にした。

- ・単元の目標
- ・付きたい力
- ・学習内容
- ・時数（使える時間）
- ・振り返り
- ・次時の見通し
- ・パフォーマンス課題
- ・教師からのフィードバック

<実践例：6年生算数「比」自己調整・自由進度学習>

担任は、単元シートを作成し、単元のはじめに子どもと共有した。シートには、単元を通して付きたい力（目標）や学習内容、単元終盤の課題（パフォーマンス課題）等を明示した。

また、1時間毎の授業では、授業のはじめに、今日自分が何に取り組むか、どのように学ぶかを入力し、見通しを立ててから自らの学びをスタートできるようにした。



<実践例：1年生算数「10より大きな数」自己調整・自由進度学習>

担任は、単元計画表を作成し子どもと共有した。単元計画表には、各時間のミッションが示されており、子どもたちは自らミッションを選択し、自分のペースでミッションを遂行していった。低学年では発達段階や学習経験を考慮し、毎時間学び方のフロー図を示すことで、学びを進める（深める）ステップが分かるようにした。とはいえ、すぐにミッションを選択できる子ばかりではない。担任は、すぐに自走できるかを見極めるため、個々の学びを丁寧に見取ることを心がけ、サポートが必要な子どもには手厚く関わった。



(イ) 【A】学ぶ内容や学び方を自己判断・自己決定し学びを深める

子どもが自ら学びを進め、深められるようにするため、学習内容や学び方を子ども自身が選択することができるようにした。これまで教師の指示を待って動く傾向が強かった子どもたちだったが、こうした学びを重ねていくうちに、自分にとって必要な学び方を考え、実行する姿が増えていった。教師は、一人一人の学びを見取ることに苦心しながら、その子にとって必要な内容や学び方を考え、サポートすることに徹した。

<実践例：3年生算数 学び方の自己選択・自己決定>

中学年においても、学びを子どもに委ね、自己選択・決定する場面を増やしていくことで、教師の指示ではなく、学び方を自らの意思で選択・決定しながら学びを深めようとする姿が見られるようになった。



子どもたちが学び方を選択しながら学習を進める中、担任は、個々の学習状況を見取り、個別最適なサポートを心がけた。子どもたちの流動的な動きの中での確かなサポートを行うために、前時までの理解状況をノートやタブレットへの書き込みから捉え、授業に臨むようにした。



(ウ) 【R】内容知や方法知、学習に取り組む感情等の視点からの振り返り

子ども自身が、今日の学びを明日の学びへつなげられるようにするため、振り返りを重視した。学年段階や学習内容を考慮し、振り返りの視点を明確化し、子どもに示した。低学年はノートやワークシートを使い、高学年にかけてICTを活用した。5、6年生では、A見通し、A実行、R振り返りを俯瞰できるようなアプリを使ったり、1枚ポートフォリオを活用したりすることで、学びの連続性や自身の成長・変化を子ども自身がより自覚できるようにした。

<1枚ポートフォリオ(右写真)>

1枚のシートに毎時間の振り返りを蓄積できるようにした。また、単元のはじめと終わりの考えを書き込むことで、自分の変容を自覚できるようにした。下段には、単元を通した自分の学び方について自己評価する欄を設けた。



<子どもの振り返り(6年生)>

- ・一つ知りたいと思ったことから色々な疑問や情報を集めることができました。問題解決に向けて私は、ネットより教科書や資料集をよく使いました。ネットより資料集などは確かなことが書いてあるので確かな情報を伝えることができます。そして、友達の意見を見て色々な着眼点に気づくこともできました。次はみんなの意見を見るではなく直接話をして討論したいです。
- ・自分でクロームブックで気になったことなど調べてたまに友達のをを見せてもらい「これいいな」と思ったものをたくさん調べたりしました。自分が知らなかった情報が友達のノートに沢山あったので比べられるのでとてもいいなと思いました。自分が調べた縄文時代、弥生時代がどう違うのか比べられたのでよかったと思います。また、自分でこの情報のときには教科書を使おう、このときはクロームブックを使おうなど自分で変えながら情報を得られたのでそれもよかったと思います。

子どもたちの振り返りから、自らの学び方を俯瞰し、自分の学び方に手応えを感じたり、学んでいるときの感情に気づいたり、今後の学び方に関する課題を自分自身で見つけ、より良いものにしていこうという前向きな気持ちをもてたりしていることがわかった。

イ 探究的な学習

予測困難な社会を主体的に生き抜くためには、自ら課題を発見し、解決に向けて適切に他者に依存しながら自分(たち)なりの解を見つけ出していかなければならない。これは探究的な学びそのものである。本校では、探究的な学習は子どもたちが主体的に未来を切り拓いていく力(主体的)を育む上で重要な学習であると捉えている。

(ア) 総合的な学習の時間における探究的な学習

これまでの本校の総合的な学習の時間は、各学年でテーマが設定され、毎年決まった流れで活動が行われるなど、形骸感の強い教師主導の学習だった。

そこで、令和6年度から「教師も子どももわくわくする探究的な学習の単元開発」を研修テーマに据え、探究のレベルや探究サイクルを意識した授業改善に取り組み始めた。

<実践例：5、6年生「学校のトラブルを解決しよう～株式会社LIXILとのコラボ学習」>

この実践はLIXIL側から提示された課題に対し、子どもたちが協働的に解決策を考え、最終的にLIXIL社員に提案するというものである。LIXIL側から与えられた課題ではあったが、「小さなアイデアがだんだん大きなアイデアになっていくところが面白い」「算数とは違った難しさがあるけど、自分たちで答えを創り出すことは楽しい」「こういう学習を下級生もやった方がいいと思う」といった声が聞かれるなど、子どもたちは大変意欲的に取り

組んだ。本実践を通して教職員は、構成的な探究学習の作り方を学ぶことができた。

本校では、令和6年度から2学年合同の総合的な学習（探究的な学習）を年間計画に位置づけている。小規模化する近未来を見据えた取組の一環である。本実践も2学年混合グループによって行ったものである。

<活動の大まかな流れ：探究レベル「構成された探究」>

AAR	単元の流れ	活動主体	探究サイクル等
見通し	LIXILからの課題提示	LIXIL・教師	課題設定
実行	校舎内の危険箇所探し	子ども	情報収集
	最重要課題の絞り込みと改善策づくり		情報整理・分析
	改善策のLIXILへのプレゼン		表現・まとめ
振り返り	LIXILからのフィードバック・学習の振り返り	LIXIL・子ども	振り返り

<活動の様子と子どもの感想>



【グループでの検討】



【オンラインでの提案】



仲間と知恵を出し合ってきた製品だからこそ、いっしょにLIXILさんに提案できて納得いく学習だったと思いました。チームの5,6年生と話し合っ、最初はみんなで「これとかどう?」や「あれなんかもいいんじゃない、これ面白そう」など楽しく学んでいきました。だけど、LIXILの皆さんに発表する日が近づいてくるにつれ、どんどん緊張して、今日の本番当日を迎えてはじめる緊張して上手く喋れるかなって思いました。だけど、5年生に「頑張ろうね!」って声をかけてもらって、頑張ることができたと思います。LIXILの皆さんに発表したときも「楽しい」って思ったし、自分たちで考えた製品を自分たちだけにしまっておくんじゃなくて、誰かに聞いてもらうということが、とても大事なんだなって思いました。それだけではなく、スポフェスのとき以上に、5年生との絆が深まったような気がします。(6年生)

子どもたちの学ぶ様子や振り返りの内容から、子どもたちが探究する楽しさや社会に貢献する喜びを味わえたことがわかった。同時に、教職員にとっても、探究の魅力を再確認する機会となった。

(イ) 教科等における探究的な学習

子どもたちに探究的な力を育むためには、総合的な学習の時間だけではなく、毎日行われる教科学習においても探究を意識した学びづくりが大切である。両者の往還によってこそ、子どもたちに確かな探究力を育めると考えるからである。

<実践例：5年生社会科「ツアーガイドになろう（自然条件と人々の暮らし）」>

本単元の大まかな流れは次のとおりである。担任は、探究サイクルを意識し、単元開発に取り組んだ。

AAR	単元の流れ	探究サイクル等
見通し	オリエンテーション（見通しとゴールの共有）	課題設定
実行	北海道または沖縄の気候・農業・観光・文化を調べる。	情報収集
	調べた中から最も興味をもったことを一つ選び追究する。（個人探究）	課題設定・情報収集 整理・分析
	ツアーガイドになって北海道または沖縄の紹介プレゼンを作成する。（チームに分かれての協働学習）	課題設定・情報収集 整理・分析
振り返り	旅行会社添乗員にプレゼン発表し、評価をもらう。 自分の学びを振り返る。	まとめ・表現



【チーム別の話し合い】



【添乗員へのプレゼン】



ツアーガイドになって、本物の添乗員にプレゼンを行うというゴールは、子どもたちにとって挑戦的な課題であったが、LIXILへの提案を経験している子どもたちにとっては、大変魅力ある活動となった。オリエンテーションで見通しを持った子どもたちは、北海道チーム

と沖縄チームに分かれ、チーム内で進んで調べる内容を分担したり、プレゼンの構成を話し合ったりしていた。

①②の実践を通して、企業や添乗員へのプレゼンというゴールを見通して学習に臨むことや新商品の開発者、ツアーガイドという立場になって自分たちなりのアイデアを活かして答えをつくることができるという活動が、子どもたちの探究心に火をつけ、主体的な学びの姿を引き出していると感じられた。

(7) 実践を通して見えてきた課題とそれに対する対応

探究的な学習の単元開発を重ね、実践していく中で、探究的な学びや主体的な学びの姿を引き出し、支えていくための教師の手立ての明確化と多様な子どもの学び方を保証するための子どもが自由に活用できる学習環境づくりの重要性が浮き彫りになった。この2点について次のように対応した。

＜探究する子どもの姿を引き出す教師の役割と責任の明確化＞

授業研究における子どもの学びの見取りや事後研修での議論、教職員のアンケート、先行事例等をもとに生成AIを活用しながら教師の役割と責任を整理し、さらにその内容について精査した上で次のようにまとめた。

＜令和6年7月末時点の整理表＞

■探究する子どもの姿

- ・問いに向かって行動する
- ・学習問題の自己設定
- ・仲間との協力
- ・課題発見
- ・試行錯誤
- ・興味を持った領域の追究

■探究する子どもの姿を引き出す教師の役割と責任

○好奇心と疑問へのアプローチ

- ・子どもたちの好奇心を刺激し、疑問を持つ姿勢を奨励する。(実社会とのつながり)
- ・問いに対して適切な資源や情報を提供し、自主的な学習をサポートする。

○学習環境の整備

- ・自分の問いに向かって行動できるよう、探究的な学習環境を整える(PBL・個別探究)。
- ・個々やグループの目的に応じて学べる環境を整備する(教室、廊下、学習室、ICT環境、WB、思考スキル等々)。

○グループワークやペアワークを組織し、仲間との協力を促進する(学習コミュニティの構築、ファシリテート、コーチング、ティーチング)。

○学習目標と課題設定

- ・子どもたちが学習問題を設定できるように、適切な指導を行う。
- ・学習目標に合わせて課題を設定するプロセスをサポートする。

○学習計画の見通しとプロセスのカスタマイズ

- ・子どもたちが自分の学習に見通しを持てるようにする。
- ・子どもたちが学習プロセスをカスタマイズできるように支援する。

○試行錯誤を生む環境づくり

- ・挑戦的な課題の提供(適切な難易度の課題の提供)を行う
- ・試行錯誤を奨励し、失敗を恐れない環境を作る。

○情報源とリソース

- ・図書館やインターネット、ICT、実務経験、体験、専門家などの情報源を紹介する。
- ・子どもたちの興味を引き出し、知識を広げるためのリソースを提供する。(体験、お話し、実験、観察、情報等)

○見取りの苦心・共同注視

- ・子どもの学びを丁寧に見取ることで、個別最適なサポートが可能になる。子どもが描いた興味・関心の方向へ教師も楽しみながら目を向け、共同探究者という感覚をもってかかわっていく。

＜活動の自由を保障する環境づくり＞

授業の中で自己選択・決定場面を増やしたり、個々の進度に合わせてたり、プレゼン機会(表現・まとめ場面)をゴールに設定したりすることが増える中、教室だけでは、多様な子どもの学び方に対応しきれない場面が見られるようになった。そこで、稼働率が減少していたパソコン室を誰もが学びに利用できる場(コモンスペース)となるよう、



【コモンスペースを利用する児童(左)、教員(右)】

夏季休業中にレイアウトを変え、子どもが必要な時にすぐ使えるプロジェクタ、大型TV、ホワイトボードなどを常設した。実際に教職員が利用し机の配置やプロジェクタの位置、大型TVの使い勝手などを確認し、最終的なレイアウトを決定したが、子どもの学びの状況により

適宜改善を行っていく予定である。

② 「思いをカタチに」プロジェクト

本校の特色ある校内行事(ラブアクションデイ:年3日)においても主体性の育成の視点から見直しを図った。これまで教師主導の側面が多かったことを改め、子どもに任せることを基本姿勢とし、子どもの思いを大切にしたい行事の準備・運営に取り組んでいる。

ア スポーツフェスティバル(スポフェス)

スポフェスとは、他校で言う運動会に当たる行事である。色別に分かれ勝敗を競うのではなく、みんなが全力で楽しむことを目的に実施している。

コロナ禍、スポフェスは種目数や時間の制限を行って実施していた。安全を最優先したため、内容、実施方法等は教師の考えに寄るところが多かった。コロナの収束を機に、主体性の育成を最上位の目標とすることを確認し、子どもに委ねる場面をできる限り多くし、教職員はその思いに伴走する姿勢でサポートすることとした。

<令和5・6年度の取組>

はじめに、高学年の子どもたちとスポフェスの目的「自分たちの力で、自分たちのスポフェスを最高の思い出にする」を共有し、準備をスタートさせた。子どもたちは開催に当たって自分たちがやってみたいことや自分たちでできることを出し合い、話し合いを重ねながら自分たちで仕事を割り振り、本番へ向かっていった。令和6年度は、前年度の経験をもとに、新たなものを含む7つの実行委員を立ち上げる姿が見られた。本番までの見通しを持って取り組む高学年の姿は大変前向きなものであった。



令和5年度実行委員会	令和6年度実行委員会
・司会進行 ・健康作り ・環境整備 ・児童会種目 ・広報	・司会進行課 ・スローガン課 ・環境整備課 ・健康づくり課 ・広報課 ・応援課 ・プログラム課

教師は、子どもたちが考える時間と試行錯誤する機会を保障したり、子どもの思いに沿った助言を重ねたりしながら子どもたちをサポートした。

<試行錯誤(トライ&エラー&トライ)の保証①>

本番までに、全体練習を2回位置づけた。1回目の全体練習後、5・6年生は集まり、練習の振り返りを行った。各課から課題を出し合い、それらをどう解決していくか話し合い、改善策をもって次の全体練習に向けて取り組むことを確認した。2回目の全体練習後も同様に振り返りを行い、自分たちの活動が改善されていること、学校全体のスポフェスに向かう機運が高まっていることを確認し、高学年の子どもたちにやりがいと手応えを感じられるようにした。



【全体練習後の振り返り】

<試行錯誤(トライ&エラー&トライ)の保証②>

2回の全体練習後、全校種目課の子どもたちは全校の動きをもっとスムーズに行えるようにする必要があると考えた。説明内容を見直したり、表示を作成したりすることで改善を図ろうとしていたが、改善策がうまくいかず不安に感じていた。そこで、昼休みを延長し、再度全校種目の練習を行うための時間を設定した。練習では、それまでよりも効率よく種目を行うことができ、全校種目課の子どもたちは自分たちの活動への手応えと自らの成長を感じることができた。

<下級生への広がり>

高学年が主体となってスポフェスの準備を進めていく中で、その姿を見た下級生が、毎朝高学年と一緒に教室を回って「スポフェスがんばりましょう」と呼びかけを行ったり、運動場の整備をする高学年を手伝ったりする(右写真)など、高学年と一緒に活動しはじめるようになった。



【全校種目課の再挑戦】



<子どもたちの振り返り>

- ・今年の5年生は、6年生と一緒に開閉会式のことや準備体操のこと、グラウンドの整備、しおり作り、草取り大会、応援団などを決めて取り組んでいました。来年5年生になったら、6年生と一緒に学校全体を動かせる5年生になりたいです。(4年生)
- ・5、6年生は最初全校種目がうまくいかなかったことがあったとき、トライ&エラー&トライがよくできていてすごいと思いました。全校のことを優先してくれた5、6年生はすごいと思いました。来年は5年生になるので、自分のことだけを考えるのではなく、全体のことを気にして生活したいです。(4年生)

高学年の主体的な姿が、下級生にはまぶしく映り、あこがれとなった。子どもから子どもへと引き継がれていく子どもが主体となるスポフェスのかたちが見えてきた2年間の取組であった。

イ あっちこっちハイキング(あちこちハイク)

あちこちハイクは、縦割り班で4つのコースに分かれて地域を巡るという伝統的な活動である。この活動は、これまでは教師側が各コースの内容を決め、子どもたちは決められた活動を行うという側面が強かった。そこで、子どもたちがより主体的に取り組めるよう、各コースの内容決定過程における子どもの裁量を増やし、子どもたちがやりたいと思うものをコース内に盛り込めるようにした。

はじめに、高学年の子どもたち対象にオリエンテーションの開き「自分たちの描くあちこちハイクを実現する」という目標を共有した。その後、子どもたちは、自分のコースでどのような体験をしたいかを話し合った。子どもたちは、これまでの経験を基にしながらも、昨年度とはひと味違う活動にしたい、1年生には、川根のよさをもっと知ってもらいたいという思いや願いをもって話し合いに臨んだ。教職員は子どもたちをサポートするため、地域の方と事前打ち合わせを行い、新たな体験活動やコース作りについて話し合い、子どもたちに情報を提供できるようにした。高学年の子どもたちは、自らつくったコース案について下級生から意見や感想をもらい、コースの修正を重ねた。コース案が固まってきたところで、子どもと地域の方との打合せ会を設定した。そこで子どもたちは自分たちの考えたコースや活動を地域の方に提案し、協力を仰いだ。地域の方は子どもの思いを尊重しながら、新たなコースに対し建設的に助言してくださった。

このような取組を通して、鹿の角を使ったアクセサリづくりやジビエ料理体験、桜茶屋の桜まんじゅう作りなど、これまでにはなかった新しい体験活動が生まれた。子どもたちは、自分たちの力で、より楽しく充実した活動をつくることができるということを学ぶことができた。同時に、地域の方々への感謝の気持ちをより強くもった。



【子どもと地域の方との打合せ会】



【下級生へのコース説明】

<子どもの振り返り>

- 去年は何にも声を掛けられなかったし、今の中学1年生に協力ができていなかった。
 今回のあっちこっちハイキングは、主に私たち6年生と5年生でしおりもコースも考えた。終わった後自分を振り返ってみたけど積極的に声を掛けられたし、自分で考えて行動できて成長したと思った。最後のあっちこっちハイキングを楽しく行けたことは、先生たちの協力、地域の方からの協力、班のみんなの協力のおかげだから感謝しかないし、ありがたい気持ちでいっぱいです。これからも、もっとレベルアップして、今よりも、もっと自分が思ったこと、自分の意見、みんなと違う考え方を大切に生きていこうと思った。(6年生)

子どもたちの活動の様子や振り返りから、より自分らしさを発揮していこうという主体性の高まりを感じることができた。

③ 「地域とトモニ」プロジェクト

少子高齢化・過疎化が進む川根地区にとって、地区の持続性と発展性を高めることは大きな課題であり、未来の川根地区を支える子どもたちとその育成を担う学校教育への期待は大きい。この期待に応えるため、地域リソースを活かした川根ならではの活動を意図的・計画的に行った。

ア あっちこっちハイキング（あちこちハイク）

毎年 10 月に縦割り班に分かれて地域に出掛けるあちこちハイクを行っている。塩本、家山、抜里、身成の4つの地域に繰り出し、各コースで川根ならではの体験活動を行っている。実施に当たっては、事前打ち合わせから本番まで多くの地域の方に協力していただいている。

<体験活動例>

コース	活動例
塩本コース	名所巡り（水目桜、八垂の滝）、鹿の角アクセサリーづくり、ジビエ料理
家山コース	地元商店買い物体験、家山駅散策、おはぎづくり、和船こぎ（右上写真）
抜里コース	名所巡り（五輪さん）、ホテルの養殖、川遊び、大井川鉄道体験、買い物
身成コース	塩づくり、紙漉き体験、職場体験（村の市）、温泉足湯体験、耳地蔵巡り



【家山コース 和船こぎ】

★見つけた川根のすてきなところを書きましょう。

どこが、どうして、すてきだとおもったのかを書きましょう。
水目桜、八垂の滝、やんちゃの滝、たりきくらの滝、すてきなところだと思った。
水目には、お花が咲いて、今でもあり、お花がさくから、いいなと思いました。自然の美しさ、生命力、力強さを感じ、その感性が素晴らしい。

【塩本コース 児童振り返り】

イ 地域講師によるクラブ活動

本校のクラブ活動は、地域の方を外部講師として招聘し実施している。活動は日本舞踊、ブッシュクラフト、パラグライダー、写真、家庭科、工作の6つである。他校では見られないバラエティ豊かなものとなっており、4～6年生の子どもたちは年間5回（各90分）のクラブ活動をもっと楽しみにしている。活動は、校内だけでなく川根地区の山や川などへ出掛けて行うことも多く、子どもたちは活動を楽しむとともに、地域のひと・もの・ことのよさを実感することができている。地域の方にとっても子どもたちとの活動は、生きがいややりがいとなっている。



【ブッシュクラフト】



【パラグライダー】



【日本舞踊】

ウ アサギマダラの飼育・放蝶

毎年、地域のアサギマダラ愛好家からアサギマダラの幼虫を寄付していただいている。昇降口に飼育スペースをつくり、羽化するまでの数か月間子どもと職員で大切に育てている。羽化した成虫は、2年生が行う放蝶集会の中で自然に帰している。子どもたちは、自分たちが世話をし、川根小を飛立ったアサギマダラが再び川根小に戻ってくることを楽しみにしている。



【2年生 放蝶集会】



【放蝶集会振り返り】→



エ 地域行事への参加

地域の行事やイベントに子どもたちも参加させていただいている。7月の七夕前には、川根温泉の入り口を彩る風鈴の絵付け、11月には、川根文化センターチャリム文化祭へ陶芸作品の出品と展示、12月には、地元あかりアートの会主催のぬっくいあかり展への行灯の出品、NPO まち

【イルミネーションの点灯】

年1回、地域の方と教職員による子育て座談会(右写真)を行い、川根に対するそれぞれの思いや願いを話し合い、共有している。ここ数年は、年々減少する入学児童数が話題の一つとなっている。1年生担任から地域の方へ「人数が少ないだけで、寂しい思いをさせたくない。たくさんの思い出を作りたいが、何かいい考えはないか。」と相談をもちかけたところ、家山地区の自治会長兼川根の桜を守る会の会長から「1年生と同年の木の植樹をしてはどうか。」という提案をいただいた。その後、川根の桜を守る会の協力を得て、実際に桜の植樹を行った。この活動は毎年行われるようになっていく。



【桜の植樹】

下のシートを活用し、各プロジェクトの進捗状況やKFSの有効性について教職員による評価・分析を行った（右写真：分析を行っている様子）。



2024 前期学校評価アンケート結果分析【プロジェクト用】

03 思いをカタチに			M:仲間と共に未来を創る力の育成、V:自分の思いを実現するために行動する子			
学年		進捗	学校全体数値			振り返り(◎成果・△課題・◇継続事項・◆改善策)
			R6.7	R5.12	R5.7	
KGI	「気持ちよく考え行動する」を最期して学校生活を送っている90%	B	88.5	86.7	84.7	子どもたちが自ら行動することによって自分たちが学校についているという意識をもてることでできる。この意識が各学年毎の各学年の目標にも継ぎ合う。継続して取り組める活動のように中学校や高校につなぐという意識が育つ。 各学年の思いに合う「気持ちよく考え行動する」という思いが実現するまでにまだ時間がかかると思う。 ●各学年の思いが育つ行動が育つこと。 ●各学年の思いに合う教育活動の推進と子どもたちの意識に合う。中学校や高校までつなぐ「気持ちよく考え行動する」や教育活動は同じと決めている。子どもたちは自分の思いに叶って行きたいという思いは少ない。目標達成に向けてモチベーションを高める必要もあれば子どもたちの思いを尊重する目標と同じようなことをしてはならないだろう。 子どもたちの思いが育つ学校生活を続けていくための。 各学年の思いが育つ行動が育つこと。 ●振り返りの取り組み。各学年の思いが育つ行動が育つこと。
	「自分(たち)の方でよりよい学校や学校をつくることができると思う」80%	A	85.2	—	—	
	「1日1日のことを考え、頑張ったり、頑張ったり、一緒に頑張ったり」93%	A	93.4	91.9	90.4	
	「1日1日がんばることがあってもいいから頑張る。頑張るよ」ということ80%	A	93.4	—	—	
KPI	●各学年の思いが育つ行動が育つこと。中学校や高校までつなぐ「気持ちよく考え行動する」や教育活動は同じと決めている90%	A	100.0	—	—	子どもたちの思いが育つ行動が育つこと。 ●各学年の思いが育つ行動が育つこと。 ●各学年の思いが育つ行動が育つこと。 ●各学年の思いが育つ行動が育つこと。
KFS	★子どもの思いを大切にしたい活動					KFSについて(◎成果・△課題・◇継続事項・◆改善策) 子どもたちの思いが育つ行動が育つこと。 ●各学年の思いが育つ行動が育つこと。 ●各学年の思いが育つ行動が育つこと。 ●各学年の思いが育つ行動が育つこと。
	「こんな学校・学年にしたい」という子どもの思いから始まる学校生活や行事の計画					
	「1日1日を頑張る」を目標としたプランニングと振り返りの実施(4ヶ月)の計画(7)					
	●各学年の思いが育つ行動が育つこと。中学校や高校までつなぐ「気持ちよく考え行動する」や教育活動は同じと決めている90%					

KFSについて(◎成果 ▲課題 ◇継続事項 ◆改善策)

◎子どもたちの思いからはじまる活動を多く実行していくことができた。

◎地域の人材を有効に活用することができていた。全学年に関わりがあった。(校外学習の見守り、体験教室、クラブ活動、読み聞かせなど)

▲キャリアパスポートを効果的に活用することができなかった。書いて終わってしまうことが多い。4月に書いた目標への意識化が薄い。

▲子どもの思いからはじまる活動をするために、教員側も子どもたちも時間に追われることがあり、考える楽しさからやりきれない苦しさになってしまう子もいた。

▲教科学習においても地域の人材を有効活用する場を考えたい。そのために教員の早めの見通し・依頼が必要。

▲全体での活動と実行委員の活動の区別化が難しかった。(周りから見て分かりにくかった。)

◇どの活動においても、子どもたちの思いを大切にしていく。

◆キャリアパスポートを簡素化した物を子どもが見ようとする場所に掲示して意識化を図る。(机の隅に小さくして貼るなど)→学年の実態に応じて、週末や月末などに簡単に定期的に振り返る場を設ける。

◆子どもたちの思いからはじまる活動を実現するために、子どもたちの姿を予測し、あらかじめ教員同士で共通理解をする必要がある。子どもの判断で難しいところは教員で決めることも大切にする。

各プロジェクトの評価・分析結果については、KGIの目標達成率(右図)とともに教職員で共有した。

同時に、各分析結果について、生成AIを活用して整理を行い、後期の重点取組事項の明確化に活用した。



<生成AIを活用した教職員による評価分析の総括>

学校生活と地域での活動の経験が豊富で、川根地域において子供たちから高い評価を受けていることは素晴らしいですね。低学年の児童には地域への探検や植樹、収穫体験などを通じて地域の人々や環境を知る経験を提供できたことも素晴らしい取組です。ただし、中高学年においては地域との関わりが少ないことが課題となっているようです。探究的な活動を通じて、地域とのつながりをどのように設定していくか、今後の課題として検討されることでしょう。

また、学年部の関わりやたてわりの活動を通じて、人間関係を築く場を提供できていることは素晴らしいです。子どもたちが自分のよさを再発見できる場を作ることは、自己肯定感を高める上で重要ですね。キャリアパスポートの活用や振り返りの場を設けることで、さらに成果を上げていけることを願っています。

どのような課題や目標がある場合でも、引き続き子供たちの思いを大切に、地域との連携を強化していくことが大切です。学年部の関わりやたてわりの活動を通じて、子供たちが自分事として行動できる場を設定できていることは素晴らしいですね。行事後の振り返りで友だちのよさを見つける場があることで、自己評価を高める機会になっていることも良いですね。ただし、自分のよさを認められない子やアピールできない子がいることに気づけて、クラスや学年部で認める場を設けていくことが大切です。周りのことを気にしすぎてしまうことで自己評価が低い傾向にある子供たちには、自己肯定感を高める機会を提供することが重要です。(個に応じた支援を意識しましょう。)

職員同士の情報交換を意図的に続けることで、子供たちの様子を素早く共有できるようになりますね。学校保健委員会を通じて、子供たちに自分らしさを大切にする意識を伝えることも良いアプローチです。学年部集会やたてわりの活動を継続して活用し、人間関係を広げていくことで、子供たちの成長をサポートしていきましょう。

授業においては、単元の開示や振り返りの時間を大切に、自己選択や自己決定の機会を提供することで、子供たちの学びを促進できる環境を整えていくことが重要です。ICTの活用や探究的な学習についても、引き続き学校や研修の時間で考えていくことで、より良い教育環境を築いていけるでしょう。

6 研究結果

(1) 主体性の高まり

①「学びのカイゼン」プロジェクト

		目標値	R6.12	R6.7	R5.12	R5.7
KGI	見通しをもって学んでいる	85.0	89.2	82.0	85.9	84.4
	振り返りで学んだこと・学び方・次の課題を書くことができていく	80.0	83.3	87.7	82.2	80.0
KPI	自分で学び方や学ぶ内容を決めることができる	85.0	87.8	84.8	84.0	81.1
	探究的な学習・活動は自分の考えを深められて楽しい	80.0	81.6	86.9	—	—
	子どもが自己決定できる場面を単元の中に位置づけている(教員)	85.0	100	90.9	100	81.8
	探究的な学習・活動の内容や単元開発にチームで取り組んでいる(教員)	85.0	90.0	81.8	—	—

学習に関しては、概ね目標値を達成できた。生活科や総合的な学習に対する教職員の授業改善意識の高さが、子どもの姿につながっていると考えられる。

学習の見通しと振り返りについて、今後も学校全体で取り組み、子どもたちの自己調整力を高め、主体的な学びを引き出せるようにする。

② 「思いをカタチに」プロジェクト

		目標値	R6.12	R6.7	R5.12	R5.7
KGI	うまくいかないことがあってもあきらめずに挑戦しようとした	80.0	90.0	93.4	—	—
	自分たちの力でよりよい学級や学校を創ることができると思う	80.0	91.7	85.2	—	—
KPI	周りのことを考え、助けたり、励ましたり一緒に活動したりできる	93.0	95.0	93.4	91.9	90.4
	重点目標を意識した具体的な手立てを意図的・継続的に行っている（教員）	90.0	100	100	90.0	90.0

行事を通して、ねばり強さや自己効力感など、子どもの主体的な活動の下支えとなる力が育まれていることが分かった。子どもの思いを大切に活動や試行錯誤できる環境づくり、失敗をおそれないマインドの育成など、継続的に取り組んでいきたい。

(2) 地域愛の深まり 「地域とトモニ」プロジェクト

		目標値	R6.12	R6.7	R5.12	R5.7
KGI	自分たちが住んでいる川根が好き	95.0	92.5	88.5	93.3	88.5
KPI	川根のすてきなところや人を知っている。	89.0	93.3	93.4	88.1	93.4
	川根のひと・もの・ことと関わるのは楽しい	90.0	90.8	86.1	91.1	89.6
	地域のひと・ものことと関わる活動を計画的に取り入れている（教員）	100	90.0	92.7	80.0	63.6
	地域愛を育むことを意識して生活科や総合を行っている（教員）	100	100	90.9	90.9	100

児童アンケート結果及び教職員アンケート結果から、全体的には高い数値結果が出ているが、目標に十分到達しているとは言えない状況である。多くの子どもたちが地域と関わる活動は楽しいと感じられていることから、地域を活用した取組をより意識的・計画的に行っていく必要がある。

(3) 今後に向けて

① プロジェクトの見直し・改善

- ・より実効性の高いプロジェクト活動となるよう、プロジェクトの目標や指標を定期的に見直し、改善していく必要がある。
- ・プロジェクトの推進に当たって、KFSをより絞り込み、各教員が集中して力を注げるようにする必要がある（教育課程の縮充を図る）。

② 新たな人材の発掘と連携

- ・地域の高齢化や人口減少による教育活動の縮小化を防いだり、地域と連携した新たな活動の掘り起こしを進めたりする必要がある。移住してきた方や転居してきた方なども含め、潜在する地域リソース（ひと・もの・こと）を発掘していきたい。
- ・現在川根に住んでいない川根出身の高校生や大学生、社会人と連携し、川根のよさや魅力を再確認できるような活動を展開していくことも地域愛を深めていく上で有効な手立てになると考える。

③ 地域外のリソースの活用

- ・市外、県外の小学校等との連携を模索し、オンラインによる協働学習や地域を教材とした探究的な学習の相互発表を行うなど、多様な出会いの機会を創出し、表現力を伸ばしたり、川根地区のよさを再確認したりすることができる学習環境をつくっていくことも地域愛の深まりと主体性の高まりにつながると考えられる。

④ 保小中の連携

- ・子どもたちの地域愛や主体性を育むことは、小学校だけの課題ではなく、同じ地域内の保育園や中学校の課題とも言える。それらの資質・能力をより確実に育むために、保小中12年間を通して地域の特色を活かした川根ならではの教育や少人数を強みにした教育を実現する必要がある。今後、保小中連携教育あるいは、保小中一貫教育による教育活動推進の在り方についても研究していく必要がある。

小規模教育研究部

学校教育目標 なりたい自分に向かって！

～今日を大切に！ よろこびをつくろう～

文責任者 峯村 紗矢（静岡市立清水浜田小学校）

I はじめに

昨年度開校70周年を迎えた本校は、学区の中心部を巴川が流れ、東側には清水港、西側には東海道線や静岡鉄道といった交通・流通の要衝が位置する清水区の中心市街地にある学校である。

令和7年度は、通常級が単学級で6クラス、特別支援学級が2クラス（知・自情各1）の児童数約150人の規模となっている。また、通級指導教室7教室（発達4、言語3）をもち、区内より70名程が通学している。特別支援教育体制に特色をもつ本校は、平成29年度よりユニバーサルデザイン（UD）の視点を学校経営に取り入れている。さらに、子供1人1人が安心して主体的に学び生活することができる学校環境の実現を図りながら、充実した学びと生活の経験からキャリア発達していくことを念頭に置いた教育経営に努めている。

II 研究実践

「UDとUDL」—インクルーシブも視野に入れて—

UDは、「個に応じた指導」という位置付けを明確にして、全ての子供が参加・活躍・居場所を実感できる教育活動の創造と実践を、教師の視点から図っていくという意図を明らかにしている。「浜田スタンダード」と呼ばれるUD実践の主な取組を3点挙げる。

(1) 環境UD

生活環境の整備・改善を図るために、前面黒板の掲示物を控えて視覚情報量を抑えたり、靴箱やロッカー、雑巾掛け等の整理・整頓の仕方を統一して整えることに努めたり、児童の椅子は、床との間で起きる不快感がならない工夫をしたりしている。また、筆箱の中味の統一や机上の教科書・ノートの置き方を揃えたりする等、学習に落ち着いて取り組むための学習環境整備も行っている。

(2) 授業UD

授業づくりでは1時間の学習のめあてなどを子供がつかむことをねらいとした「焦点化」、視覚的に見て学習を分かりやすくするための「視覚化」、問いや互いの学びを把握するための「共有化」の3つを柱にしている。さらに1時間の学習の流れを提示する「見通しボード」やchromebookなどのICT機器の活用等を絡め、どの子供も安心して、「わかる、できる」に向かうための授業展開をめざしている。研究授業において

も、個々の子供の授業参加度を時系列で追ったり、「焦点化」「視覚化」「共有化」の視点から分析したりして、「わかる・できる」に向かう授業実現につながったかどうかを検討し合っている。

(3) 教科UD

各教科・道徳・総合的な学習の時間はそれぞれがもつ「見方・考え方」を働かせて子供が学ぶための支援である。これら教師の視点である「個に応じた指導」のUDの考えに、令和4年度から「子供が個別最適な学びを育む視点」として、UDL（UD for Learning 学びのユニバーサルデザイン）の考えを取り入れた。UDLは、子供が「主体者」として、「深い学び」を味わい経験していくための確かな子供理解と「情意（なぜ）」「認知（なにを）」「方路（どのように）」に沿って子供の学びに選択肢（オプション）を提供する支援の営みである。UD（指導の視点）とUDL（学びの視点）の両輪での授業・生活づくりの一層の充実を図りながら、さらに令和6年度からは、多様性を尊重するインクルーシブ（DE&I）な教育が息づく通常学級、特別支援学級、通級指導教室の具現化にも視野を広げてきた。

そこで、本稿では、DE&Iの具現化を視野に入れた現在の取組について、2つの事例を紹介したい。

(1) 連携型通級指導の試み

通級指導教室に通う児童の中には、在籍学級で多くの困難さを感じ、2次障害が生じる一歩手前の状態の児童もいる。そんな児童に対して、昨年度から通級指導教室（以後、通級と呼ぶ）での個別指導と合わせて、週1回通級指導教室担当（以後、通級担当と呼ぶ）が児童の在籍学級で教室支援を行う連携型通級指導を開始した。

A LDの児童への連携型通級指導

自分と他者を比べ、違いに苦しみ登校を渋り始めていた児童に対し、昨年度から連携型通級指導を始めた。平仮名や片仮名の読み書きを主訴に入級したAさんは、入級当時、授業中に学習が分からないこと、自分だけやり直しが多い現実辛さを感じ、登校を渋るようになっていた。学習に対して意欲が低下し、通級での学習もなるべく少ない量で終わりにしようとしていた。そんなAさんに対し、通級では「平仮名を正しく想起し書くことができる。」「特殊音節を含む言葉の

音韻を正しく理解し拍を打つことができる。」を、教室支援では「通級指導の学習を活かし、在籍学級の学習に取り組もうとする。」「困った時に支援を求めることができる。」を目標に設定した。通級でAさんに合わせた指導を行うことで自分に合った学習法を身に付け、在籍学級でも学級担任や通級担当からの支援を受けながら、個別学習でつけた力を少しずつ発揮することができた。今年度も連携型通級指導を継続しているAさんは、まだ学習に困難さを感じる事が多い。しかし、通級の個別指導では、自分から進んで学習に取り組むようになり、「もっとやりたい。」と前向きな発言が多く聞かれるようになった。今でも登校を渋ることもあるが、そんなときにも「もっと通級で勉強したいから、学校も頑張っている。」と出掛けて行くと母親から聞くこともできた。

イ ASD児への連携型通級指導

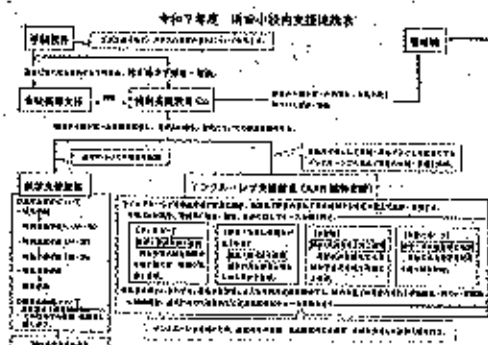
Bさんは、感情が高ぶったときの、衝動的な行動を止めたいと思っているのに自分では止められず、他児童からも悪い事ばかりすると思われると感じ苦んでいた。そのため、通級では「怒りのコントロールやマイナス感情の適切な取り扱いについての課題を自覚し、怒りの性質や、感情の色々なコントロール法を知る。」を、在籍学級では「在籍学級内で成功体験を積み、学級での生活を前向きに送ることができる。」を目標にして昨年度から連携型通級指導を開始した。通級の個別指導では、自分の気持ちをコントロールするために自己認知や他者理解を深め、アンガーマネジメントを学ぶ時間を設けた。それと並行して、在籍学級での週1回の支援ではBさんだけでなく、クラス全体に対し通級担当がモデルとなって、友達との望ましい関わり方を示したり、教室環境を整えたりしながら、Bさんや周囲の友達の素敵な部分を言語化して伝えていった。また、在籍学級で見取って来たBさんの望ましい姿を、通級指導時にBさんに聞こえるように保護者に伝え、一緒に喜ぶ姿を見せた。教室支援に行くことで見取ったBさんの小さな変化や努力を価値付け、Bさんにも保護者にも少しずつ成長していることを伝え続けた。今年度も連携型通級指導を継続しているBさんは、昨年度までなかなか参加できなかった苦手な教科にも取り組み、友達とトラブルになったときにも衝動的に他害行動に出るのではなく、自分から別室にクールダウンに行けるようになってきた。

連携型通級指導では、通級での学びの定着が確認できるだけでなく、在籍校で学習指導要領自立活動27の視点で児童や児童を取り巻く環境と関わることで、通級児童の困難さの軽減につながっている。

(2) 自立活動27の視点を活用した校内支援

本校は昨年度まで、通常級6学級に対し通級担当がサポートに入る「サポート学年制度」を行っていた。しかし、今年度からサポート学年制度を廃止し、小規模校である本校だからこそできる取組を始めた。

それは、通級担当者全員が校内のインクルーシブ支援担当になり、特別支援教育コーディネーターを務める通級担当が中心となりインクルーシブ支援を組織的に機能させる以下の図の取り組みである。



全て単級だとしても、1つの学級には言語、行動、コミュニケーションなど様々な面で必要な支援が異なる児童が複数名いる。その多様な児童のそれぞれの困り感に合わせ学級内で支援ができるよう、通級指導という主訴に当たる部分を通級担当が検討し、児童に合う担当を決め、児童や保護者に対応するようにした。昨年度から登校を渋ることが多かった児童には、朝、支援担当が児童を出迎え一日の予定を確認したり、援助希求の出し方、早退する場合のお迎えを確認したりしている。時間を取り、児童の気持ちを聞き出したり、保護者との面談にも同席したりしている。

Ⅲ 成果と課題

児童の在籍学級内で一人一人に合わせた環境を整え支援を行うことは、児童の困難さの改善に大きく働き掛ける。校内児童も、他校の連携型通級指導児も自分のホームである在籍学級で支援を受けられることで、安心して困難さの改善に向かうことができる。

今後は、通常学級の担任にもインクルーシブの考え方や児童一人一人に合わせた様々な支援法を広めながら、校内支援としてできる範囲や、職員の働き方に負担を避けつつ実施できる支援法について検討していく必要があると感じている。

- 1 研究主題 『主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成』
～児童生徒一人一人が他者とつながり、地域とともに「生きる力」を伸ばす～
学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～

- 2 日 時 令和7年11月6日（木）～11月7日（金）2日間

- 3 会 場 1日目 全体会・分散会：長岡市立劇場・さいわいプラザ・長岡市教育センター他
2日目 新潟県内7校・7会場

A：長岡市立東谷小学校 B：小千谷市立東山小学校
C：魚沼市立魚沼北中学校 D：南魚沼市立五十沢小学校
E：南魚沼市立中之島小学校 F：十日町市立飛渡第一小学校
G：津南町立上郷小学校

- 4 日 程

【1日目：全体会】

- (1) 開会式
(2) 基調報告
(3) 特別講演 演題「探究を中核とした教育課程の創造
～学習指導要領の改訂を視野に入れて～」
講師 文部科学省 初等中等教育局 主任視学官 田村 学 氏
(4) 次年度開催地挨拶・大会旗引継 岐阜県
(5) アトラクション
(6) 第4分散会

【2日目：分科会】

*第A分科会「長岡市立東谷小学校」に参加

- (1) 公開授業1・2
(2) 研究発表・研究協議 等
(3) 閉会行事

- 4 感想等

1.全体会（1日目）

- ・全国共通課題のもと、小規模校の特性を生かした学校・学級経営により、自ら学ぶ意欲に溢れた児童・生徒が育っていることが報告や分散会の発表からわかった。
- ・地域素材を存分に使った実践が、逞しく成長する児童の育成につながった発表があった。児童を放任するのではなく、意図をもった教師の関わり（出過ぎず、個の表れをつかみながら時を見て介入する）が学びの深まりには必要であることを感じた。
- ・講演では、「探究の充実を情報活用能力が支える」「音声言語、文字言語を使ったアウトプットの重要性」「教師の関わりや指導性の大切さ」など大変参考になった。

2.分科会（2日目）

- ・地域の良さや素晴らしさを深く知り、継承していきたいという思いが伝わってきた。
- ・課題にも挙げられていたが、問いが児童のものになっているか、対話が付けたい力につながっているか等、小規模だからこそできる深い学びの検証が必要であると感じた。

- 1 研究主題 『主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成』
～児童生徒一人一人が他者とつながり、地域とともに「生きる力」を伸ばす
学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～

2 日 時 令和7年11月6日（木）～11月7日（金）2日間

3 会 場 1日目 全体会・分散会：長岡市立劇場・さいわいプラザ・長岡市教育センター他
2日目 新潟県内7校・7会場

A：長岡市立東谷小学校 B：小千谷市立東山小学校
C：魚沼市立魚沼北中学校 D：南魚沼市立五十沢小学校
E：南魚沼市立中之島小学校 F：十日町市立飛渡第一小学校
G：津南町立上郷小学校

4 日 程

【1日目：全体会】

- (1) 開会式
(2) 基調報告
(3) 特別講演 演題「探究を中核とした教育課程の創造
～学習指導要領の改訂を視野に入れて～」

講師 文部科学省 初等中等教育局 主任視学官 田村 学 氏

- (4) 次年度開催地挨拶・大会旗引継 岐阜県
(5) アトラクション
(6)

【2日目：分科会】

*第B分科会「小千谷市立東山小学校」に参加

- (1) 公開授業1・2
(2) 研究発表・研究協議 等
(3) 閉会行事

4 感想等

1日目の特別講演は、田村先生の講話で、総合的な学習の時間がとても重要であることについて説明があった。分かりやすく、子供の様子を踏まえた内容だったので、今後の学校運営に生かすことができると感じた。

2日目の分科会は、全校児童14名のとても小さな学校であったが、子供たちがとても生き生きとしていて、ふるさとを誇りに思っている様子が感じられた。子供の特性を生かした授業で、教員との関係性もよく、長い期間の継続的な取組がしっかりと子供の力になっている様子も見られた。

全体を通して、新潟のへき地教育がとても充実していることがわかった。少ない人数でもふるさとの良さをしっかりと継承し、繋げている姿が見られたことで、多くのことを学ぶとともに、前向きに教育活動を進めていこうとする意欲も高まる有意義な全国大会であった。

川根本町立光の森学園 植野 裕紀子

- 1 研究主題 『主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成』
～児童生徒一人一人が他者とつながり、地域とともに「生きる力」を伸ばす
学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～

2 日 時 令和7年11月6日(木)～11月7日(金) 2日間

3 会 場 1日目 全体会・分散会：長岡市立劇場・さいわいプラザ・長岡市教育センター・他
2日目 新潟県内7校・7会場

A：長岡市立東谷小学校 B：小千谷市立東山小学校
C：魚沼市立魚沼北中学校 D：南魚沼市立五十沢小学校
E：南魚沼市立中之島小学校 F：十日町市立飛渡第一小学校
G：津南町立上郷小学校

4 日 程

【1日目：全体会】

- (1) 開会式
- (2) 基調報告
- (3) 特別講演 演題「探究を中核とした教育課程の創造
～学習指導要領の改訂を視野に入れて～」
講師 文部科学省 初等中等教育局 主任視学官 田村 学 氏
- (4) 次年度開催地挨拶・大会旗引継 岐阜県
- (5) アトラクション
- (6) 第4分散会に参加

【2日目：分科会】

*第A分科会「長岡市立東谷小学校」に参加

- (1) 公開授業1・2
- (2) 研究発表・研究協議 等
- (3) 閉会行事

4 感想等

初めて全国へき地教育研究大会に参加させていただき、多くの学びがありました。特別講演では、各教科で学んだ知識や技能を総合的な学習の時間の活動でも活用し発揮できるようにすることや、探究のサイクルが大切だと改めて感じました。分散会で2校の発表を聞き、地域の方も一緒にふるさと教育の年間計画を見直していることや、全教職員が共通理解を図り取り組むことで生徒が力を伸ばしていることがすばらしいと思いました。また、東谷小学校の授業参観では、今までいろいろな活動を積み重ねたことで、児童の次への意欲を高め、自分事として考えることができたのだと感じました。グループ活動では、友達の考えと比べながら自分の考えを話したり、友達と協力して活動を進めたりする姿も見られました。指導・助言で教えていただいた教師の役割（内発的動機付けを喚起、子供の必要感を大切にする、実態に基づいて単元計画を調整、資質・能力が発揮され育まれているか見取り励ます）について、これからの自分自身や自校の実践に生かしたいと思いました。

- 1 研究主題 『主体的・協働的に学び、ふるさとへの誇りと愛着をもった人間性豊かな子どもの育成』
～児童生徒一人一人が他者とつながり、地域とともに「生きる力」を伸ばす
学校・学級経営と学習指導の深化・充実をめざして～

2 日 時 令和7年11月6日（木）～11月7日（金）2日間

- 3 会 場 1日目 全体会・分散会：長岡市立劇場・さいわいプラザ・長岡市教育センター他
2日目 新潟県内7校・7会場
A：長岡市立東谷小学校 B：小千谷市立東山小学校
C：魚沼市立魚沼北中学校 D：南魚沼市立五十沢小学校
E：南魚沼市立中之島小学校 F：十日町市立飛渡第一小学校
G：津南町立上郷小学校

4 日 程

【1日目：全体会】

- (1) 開会式
(2) 基調報告
(3) 特別講演 演題「探究を中核とした教育課程の創造
～学習指導要領の改訂を視野に入れて～」

講師 文部科学省 初等中等教育局 主任視学官 田村 学 氏

- (4) 次年度開催地挨拶・大会旗引継 岐阜県
(5) アトラクション

【2日目：分科会】

第B分科会「小千谷市立東山小学校」に参加

- (1) 公開授業1・2
(2) 研究発表・研究協議 等
(3) 閉会行事

4 感想等

文科省主任視学官の田村氏の記念講演からは、次期学習指導要領の改訂を見据えた教育課程のカリキュラムマネジメントを進めていく必要性を感じた。今後、総合的な学習の時間だけでなく、各教科においても探究的な学びを取り入れ、教育課程全体の中心的な役割として位置づけることを重視していきたい。分科会会場となった小千谷市立東山小学校は複式3学級、特支級1学級、全校児童が14名の学校で、「学びをつくる子どもの育成」を研究主題として取り組んでいた。授業の中では、地域の素材（人、もの、こと）のつながりを視点としながら、課題設定、情報収集、整理分析、まとめ表現の探求サイクルを大切にした学習過程の工夫が見られた。「ふるさと学習」として様々な地域の素材を児童の実態や発達段階、教科の関連を図りながらカリキュラムマネジメントし、6年間のつながりを重視した年間指導計画や学年系統図などを作成している点など大いに参考になった。震災の影響を受けて以来、児童数が減少する中でも、東山地域の伝統や文化を大切にしている姿勢が印象的だった。講演内容と実践を重ね合わせて参観できる有意義な研修会となった。

1 日時 令和6年9月11日(水) 第2校時(9:10~9:55)

2 学級 第1学年1組 男子4名 女子4名 計8名

3 主題名 わがままをしないで 「かぼちゃのつる」

内容項目 A 節度、節制

4 主題設定の理由

本時のねらいは、わがままに振る舞う主人公が、車につるを切られてしまったときの気持ちを考えることを通して、周囲の人と自分のことを考え、わがままをしないで生活しようとする心情を育てることとする。

本時は内容項目A「節度、節制」の第1学年及び第2学年「健康や安全に気を付け、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする」とに関する主題を設定した。

低学年の発達段階では、まだ基本的な生活習慣が身に付いていなかったり、自分の思ったとおりに行動するあまり、周りに対する気配りや思いやりをもつことができなかったりと、他人を困らせてしまう場合がある。自分のわがままな気持ちを抑えて生活する態度は、自分だけではなく、周囲の人と共に過ごしていくうえでとても大切である。自分さえよければよいという自己中心的な生活態度では、集団の中で気持ちよく生活することはできず、他人に迷惑を掛けてしまうことになる。そうならないためには、自分勝手な行動をせず、周囲の人のことを考えて自分のわがままな心を抑えて生活することが大切であると考えようとする。

5 子供の実態

1年生の子供たちは入学して5ヶ月が経過し、学校生活にも慣れてきた。一つ一つのことが目新しく、新鮮なこともあり、前向きに取り組むことが多い。5月末に行われた運動会では、体育の時間や昼休みに表現種目や応援などを覚えて一生懸命練習に取り組む姿が見られた。日々の授業で子供たちは、ひらがなの形や字を覚えることや、算数の数の概念を覚えることに苦戦していたが、繰り返し練習をすることでできるようになった。休み時間や昼休みには、楽しすぎるあまりに周りが見えなくなってしまうことがある。時間が過ぎているにもかかわらず遊び続けてしまったり、授業が始まるのに話し続けてしまったりするときがある。そこで、休み時間や昼休みに入るときには、終了の時刻を明示するようにした。そうすることで、その時間を意識してお互いに声を掛け合って遊んでいる物を片付けることができた。また集中力の乱れから、話を最後まで聞けずに逃げてしまうことや、姿勢が崩れてしまうこともあったが、子供たち同士で声を掛け合う姿も見られるようになり、子供たち自身がやるべきことに向かえるようになってきている。夏休みに行った個別面談での家庭の様子から、子供たちの多くはゲームや運動など自分の好きなことを優先してしまい、やるべきことを後回しにしていたり、手伝いは進んでいなかったりと、周囲のことを考えて行動するよりも自分が中心になっている実態が分かった。

そこで、今回の道徳の授業では、自分勝手にぐんぐんとつるを伸ばしたかぼちゃと注意をした生き物たちの気持ちを考えることを通して、自分のことだけでなく、周囲の人のことを考えて生活しようとする

る心情を育みたい。

6 単元観（題材観・教材観）

本教材は、わがままなかぼちゃが、周りのことを考えずに自分のつるを伸ばしていき、みつばちやちようちょ、小犬などの忠告を聞かずに道まで勝手につるを伸ばしていくが、トラックにつるを切られて泣いてしまうという話である。

「きもちがよいのは？」（節度、節制）の学習では、散らかったロッカーやお道具箱と整理整頓されたロッカーやお道具箱を見て、どうしたら気持ちよく生活することができるかをみんなで考えた。「お道具箱を整理すると自分が楽に使える。」という自分のために行動する意見もあったが、「整理整頓されているとみんなが気持ちいい。」「みんなが嬉しい気持ちになるよ。」など身の回りをきれいにすることで周りの人も気持ちよく生活できると認識した。「きをつけて」（節度、節制）の学習では、「道路でボールを追いかけると飛び出すことになるからあぶないし、運転手にも迷惑がかかる。」「広がって歩くと後ろの自転車の人とぶつかっちゃうね。」などボールあそびや道路での歩き方を見て、どうしたら安全に過ごすことができるかについて考え、自分や周りの安全についての意識を高めることができた。

今まで行った節度、節制の授業では、自己の安全や規則正しい生活など自分に関わることや周りのことも意識した意見もあった。しかし、子供たちはこれまでに授業が始まる時間になっても遊びや会話を続けてしまうなど、実生活では、周りのことを考えず自分の思いが中心になって行動することが多い。

そこで本時では、主人公の気持ちを考えることを通して、自分のわがままな行動や気持ちを抑え、周りの人のことも考えて行動する態度や心情を養っていきたい。そのためには自分のやりたいことを中心に考えるのではなく、一歩踏みとどまって相手や周りのことを考える必要がある。相手のことを考えて行動することができるようにしていくために、対話を通して、わがままな行動によって周りの人も嫌な気持ちになったり迷惑がかかったりすることに気づくようにしたい。全体で対話をする前にペアで役割演技をすることで、相手の立場になって考えたり、登場人物に自分を投影して自分の思いを素直に表現できるようにする。そして、全体の対話に繋げることで、子供たち同士で「みんなのことも考えない」と。「自分勝手にするのはよくない。」など周りのことを考えられるようにしたい。最後に今日の授業を振り返り、自分がこれからどうしていきたいかワークシートに記入し、今後の日常生活に繋げていきたい。

7 研修との関わり

今年度の本校の研修テーマは「根拠をもとに考え、対話を通して解決する子」である。「根拠をもとに考え」とは、課題や問いに対して、なぜそうなるのか/自分の考えの根拠となる部分はどこにあるのか、それをもとに自分の考えを明らかにしていくことである。「対話を通して解決する子」とは自分の考えがまとまらないときでも、どの部分が分からないのか、自分が明らかにしたいところはどういうことなのかについて対話を通して解決していくことができる子を指し、国語、算数を中心に研修を進めてきた。

これまでの1年生の授業では、「根拠をもとに考え」は国語の説明文の授業で、線を引いて「○○だから」と答えの根拠、自分の考えの理由となるところが分かるように授業を進めてきている。算数の授業では加法減法などで、絵や問題文の言葉から立式の根拠となる部分を探して子供たち同士で共有して

いる。また、具体物を動かし、イメージを持たせることで「合わせて」「増えると」「減ると」などなぜそうなるか子供の言葉で伝え合えるようにしてきている。「対話を通して解決する」は、子供たちはどの授業でも自分の考えたことや分かったことを進んで発表する。しかし自分の意見を表現することが中心になっていて、相手の意見から考える、思いを深めるために再構成するまでには至っていない。

そこで本時では、範読での ICT の活用、登場人物の挿絵や表情カードを使うことで、子供たちが表情や教材文の内容から、自分の考えや思いの根拠をつかめるようにしたい。「対話を通して解決する」ためにペアでの役割演技を取り入れる。本学級の子供は以前行った道徳の授業の際に、前に出て発表することを恥ずかしがったり、自分の思いを表現することが難しかったりする子供がいた。そこでペアでの役割演技を取り入れ、少人数で行うことで自分の思いを素直に表現できると考える。日常生活で自分の思いを素直に出せない子でも登場人物に自己投影することで自分の思ったことを表現することができるようになることを期待する。また、一人では注意している生き物やかぼちゃの気持ちが分からない子供もいると考えられるので、ペアで役割演技をすることで対話をしながら実体験をもとに気持ちをつかめるようにしたい。

8 本時の指導

(1) 目標

周りのことをあまり考えずに自分のことを中心に行動していた子供たちが、自分勝手な行動をする主人公や注意する生き物の気持ちや、泣いてしまった主人公の気持ちを考えることを通して、周囲の人と自分のことを考え、わがままをしないで生活しようとする心情を育てる。

(2) 本時の視点 (3) 対話の工夫②ねらいの達成を明確化した学習形態の工夫

主人公の心情や注意してくれた生き物の心情を自分事として考えられるように、役割演技や板書、補助発問が工夫されていたか。

(3) 本時の構想

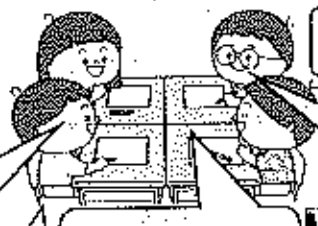
まず導入では、「わがまま」とはどんなことかを尋ねる。「自分のことばかりやること。」「ダメって言われるのに続ける。」「自分勝手なこと。」等の意見を出させることで、わがままな行動についてイメージを持たせたい。内容を分かりやすくするために、範読に入る前に登場人物について確認する。教材文の範読は、紙芝居形式で電子黒板を使用して行う。その際に、内容を理解することに不安がある A や B のそばに行き、絵を指さしたり、声かけをしたりして教材文を捉えやすくする。範読を聞いた子供たちは「かぼちゃがわがままだね。」「最後かわいそうだった。」等と感想をつぶやくことが予想されるので、感想を受け止めながらかぼちゃの気持ちについて考えていくことを伝える。「かぼちゃはつるを伸ばしているときどんな気持ちだったかな。」と尋ねると「どんどん大きくなりたい。」「うれしい。」などと自分の思いのままに行動するかぼちゃの様子について発言するだろう。もし発言が停滞してしまう場合には、「みんなは遊んでいるときはどんな気持ちになる？」などと問い返し、楽しいことをしているときの子供たちの気持ちとつるを伸ばして嬉しい気持ちのかぼちゃを繋げて考えられるようにする。言葉で表現することが苦手な A には、このときのかぼちゃの気持ちを表情カードで選び、自分の好きなことをやって楽しんでいるかぼちゃの気持ちを捉えられるようにする。

次に、注意しているはち、小犬、すいか、ちょうちょと注意されているときのかぼちゃの心情について尋ねる。AやBは全体の前で役割演技を行うと発言しづらいので、ペアで役割演技を行い、AやBが登場人物の心情を捉え、対話をしながら思いを深められるようにしたい。それぞれのペアで注意している生き物と注意されているかぼちゃに立場を分けて考えるようにする。わがままなかぼちゃを演じることに否定的な子が多い場合には「どうしてかぼちゃが嫌なの。」等と問いかけ、かぼちゃがわがままな行動をして周りを困らせていることを全員で共有する。かぼちゃについて考える子供たちは「いいじゃないか。」「ぼくは楽しいからいいんだ。」などと注意されてもお自分のことしか考えていない気持ちについて捉えるだろう。はちやちょうちょなど注意する生き物について考える子供たちは「なんで言うことを聞いてくれないんだろう。」「かぼちゃさんは自分勝手だなあ。」「困るなあ。」などと発言するだろう。登場人物の挿絵や吹き出しを活用して板書し、わがままをするかぼちゃと嫌な思いをしている周りの生き物の気持ちの対比を示す。役割演技終了後、子供たちに「注意していてどう思ったかな。」、また見ていた子供たちには「見ていてどう思ったかな。」等と問いかけ、かぼちゃのわがままな行動によって周りが迷惑をしていたり、嫌な思いをしたりすることを気付けるようにする。

次に「トラックにつるを切られてしまったかぼちゃはどんな気持ちだったかな。」と問う。「もうわがままなことはしないようにしよう。」「周りのことも考えて行動しないといけない。」「わがままをしなければ良かった。」などの考えが出るだろう。わがままをすると自分にも周りにも迷惑がかかったり嫌な思いをしたりすることをつかめるようにしたい。また「トラックが悪いんだ。」「もっと大きくなりたかった。」などかぼちゃが自分のことしか考えていない発言が続いた場合には、「トラックが悪いのかな。」「かぼちゃはどうしたらこうならなかったのかな。」などと問い返す。そうすることで、自分のわがままが自分にも周りにも不利益を与えてしまったことや、周りのことを考えて行動することで全員が気持ちよく過ごせるようになると共感できるようにしたい。

終末に本時のテーマに戻って、自分はこれからどうするか、ふり返りをする。「自分のことだけではなく、周りのことも考えて行動したい。」「何かやりたいことがあっても我慢するときは我慢するようにしたい。」「注意されたらやめるようにしたい。」など、わがままをしないで行動をすることについて思いを深め、今後の生活につなげていけるようにする。

9 本時の展開

段階	予想される学習活動・予想される子供の反応	留意点 ☆支援 …… 評価	形態
つかむ	○「わがまま」ってどんなことだと思いますか。 ・自分のことばかりやる。・ダメって苦われるのに続ける。 ・好きなことしかしない。・自分勝手なこと。	●子供たちがわがままについて挙げていき、わがままな行動のイメージを持てるようにする。出てこないときには「わがままをしたことはある？」などと自分の生活をそうして考えられるようにする	↓全体
見通す	わがままばかりしていると…… ○つるをぐんぐん伸ばしているときかぼちゃはどんな気持ちだったかな。 ・もっと大きくなるぞ。・楽しいな。・とてもいい気持ちだな。もっと速くまで伸びるぞ。	☆登場人物の気持ちを言葉で表現することが苦手な A に表情カードを選ばせ、かぼちゃの気持ちがつかめるようにする。また、かぼちゃの気持ちが分からなければ、「遊んでいるときはどんな気持ちになる？」など実生活との繋がりを意識して、発問を促す。	
深める	かぼちゃと注意した生き物たちはそれぞれどんな気持ちだっただろう  うるさいなあ。ぼくの勝手だろう。 みんなが使うところなのにひどいなあ。 もっともっと大きくなってやる。その方が気持ちいい。 狭いから少しぐらいそっちに行っちゃっていいじゃないか。 みんなのこと考えない。 どうしてきいてくれないんだろう。 「かぼちゃがつるを伸ばすのは悪いことなのかな。」と問いかけて嬉しより、周りを考えないで自分の好きなことをしているからよくないことを理解できるようにする。 どこにつるを伸ばしたってぼくの勝手だろう。ほっといてくれよ。	●ペアでかぼちゃ・注意した生き物に役割を決めて役割演技をしながら対話をする。役割はかぼちゃ、注意する生き物を子供たちが選択するようにする。 ●役割が注意した側に偏る場合には「どうして。」等と聞いて、かぼちゃのわがままさについて共有する。 ☆全体に発表することや、登場人物の気持ちを考え、思ったことを表現することが苦手な A や B にはペアで対話をさせたり、「どう思ったかな。」「なんて言ったと思う」等と問いかける。 ●役割演技をした子や見ていた子に「どう思ったかな。」等と聞いて、かぼちゃのわがままさに周りが迷惑していることをつかみ、自分の思いだけでなく周りのことも考えなければいけないことを評さえる。	ペア↓全体
ふり返る	○つるを切られたときかぼちゃはどんなことを考えたかな。 ・こんなことをしなければよかったな。・ぼくが自分勝手なことばかりしたから悪いんだ。・みんなに迷惑を掛けてしまったな。・これからわがままをしないようにしよう。・いたいよ。なんてことするんだ。 まとめ わがままをしないとみんなが気持ちよくできる。 ○これからの生活でどのようにしていきたいと思いましたが。 ・自分のことだけでなくまわりの人のことも考えて行動する。 ・あまりやりすぎないようにする。 ・我慢するときは我慢しなければいけない。	●車のせいにする意見が出た場合には「車が悪いのかな。」「何が良くなかったのかな。」等の問い返しをして、かぼちゃのわがままな行動が原因であることをつかむ ☆考えが思いつかない A や B には、「かぼちゃは何がいけなかった。」「どうすればよかった?」などと尋ねる。 ●ワークシートに記入して、わがままな行動をしまったかぼちゃの行動や、注意してくれた生き物の思いに触れてわがままをしないで過ごすことに思いを深められるようにする。	全体 個別

本時終了後に期待する姿

周囲の人と自分のことを考え、わがままをしないで生活しようとする

抽出児について

児童名 (〇〇 〇〇)

1 現在の姿、および抽出児設定の理由

学校生活では、自分のやるべきことや係の仕事に一生懸命取り組み、また自分から進んで動こうとする一面がある。友達を誘って外に遊びに行ったり、多くの子供と関わったりすることができる。その反面、自分の思いだけで行動することがあり、友達や周りのことに目が向かないときがある。また、休み時間に遊んでいたりと、自分の好きなことをしていると切り替えが難しく、時間を忘れて遊んでしまうところがある。授業中には、机の上の物を触ったり、物がなくても手いたずらをしてしまったりするときがあり、集中力が継続しないことがある。そのため、必要のないものはしまう、姿勢を整え、聞く準備ができるよう声かけをするようにしてきている。

道徳の授業では、場面絵を見て電子黒板を指差しながら説明するなど、意欲的に取り組む。教材文を聞くときには姿勢が乱れてしまったり、集中が続かなかったりすることがある。教材の内容も、文章が長いと頭の中で整理することが難しそうな様子も見られる。役割演技を授業内で行った際には、なかなか自分から前に出て発表することができないときもあった。一学期に行った「きもちがよいのは」(節度・節制)では、「整理整頓をすると自分が楽に使うことができる。」と自分の物を整理することで自分が過ごしやすくなることについて思いをもった。

本時に関して、視覚資料を多く活用して、本人が集中して授業に取り組むことができるようにしたい。またペアでの役割演技を取り入れることで、活動に前向きであるよさを生かしながら、少人数で行うことで自分の思いを表現できるようにしたい。そして、自分の思いだけでわがままに行動するのではなく、周りのことも考えて行動できるようになってほしい思いがあるため、本時では抽出児に設定した。

2 本時でめざす姿

集中して授業に取り組みながら自分の考えを持ち、周りの人のことも考え、行動できる心情について思いを深めてほしい。

3 そのための手立て

(つかむ)

「わがまま」についてどんなことを聞き、本人の意見や友達の意見を挙げることで、わがままなことへのイメージを持てるようにする。出てこないときには「わがままをしたことはある？」などと他の子供に尋ね、抽出児が自分の生活を想起して考えられるようにする。

(深める)

表情カードや板書の吹き出しなどを活用し、登場人物の気持ちが整理できるようにする。役割演技を行い、登場人物の気持ちになりきって理解できるようにする。あらかじめペアを決めておき、抽出児が自分の意見を表現しやすいようにする。

(ふりかえる)

かぼちゃの行動や、注意してくれた生き物の思いに触れて、テーマに戻って「これからの生活で自分はどのようにしていきたいか。」を書き、周りの人のことも考えて行動することについて思いを深められるようにする。

4 単元終了後の姿

学んだことを活かし、今後の学校生活でも自分の思いを中心にするのではなく、周りのことも考えて行動できるようになることに期待する。

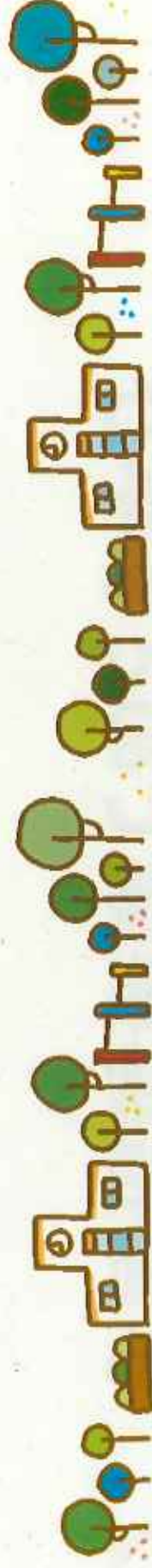
令和7年8月6日(水)

～令和7年8月21日(木)

令和7年度静岡教研小規模教育研究大会

@オンデマンド

学習指導要領で目指す学び ～小規模校の1人1台端末の実践を考える～



守口市教育委員会事務局

教育部 学校教育課

前馬 彰策

※所属およびスライドの内容は令和7年3月12日時点です

本日の流れ

1. 教育改革の背景
2. 学習指導要領でめざす学び
3. 事例から学ぶ
4. まとめ

本日の流れ

1. 教育改革の背景

2. 学習指導要領でめざす学び

3. 事例から学ぶ

4. まとめ

これからの学校には…… (略)
一人一人の児童 (生徒) が、
自分のよさや可能性を認識するとともに、
あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、
多様な人々と協働しながら
様々な社会的変化を乗り越え、
豊かな人生を切り拓き、
持続可能な社会の創り手となることができるよ
うにすることが求められる。

6つの側面から

①人口減少・少子高齢化

人口の推移と将来推計

◆ 国立社会保障・人口問題研究所の予測では、少子高齢化の進行により、2040年には年少人口が1,142万人、生産年齢人口が6,213万人まで減少し、我が国の総人口の三分の一以上が65歳以上となる。



※推計値は出生中位(死亡中位)推計による。実績値の1950年～1970年には沖縄県を含まない。

1945年については、1～15歳を年少人口、16～64歳を生産年齢人口、65歳以上を老年人口としている。

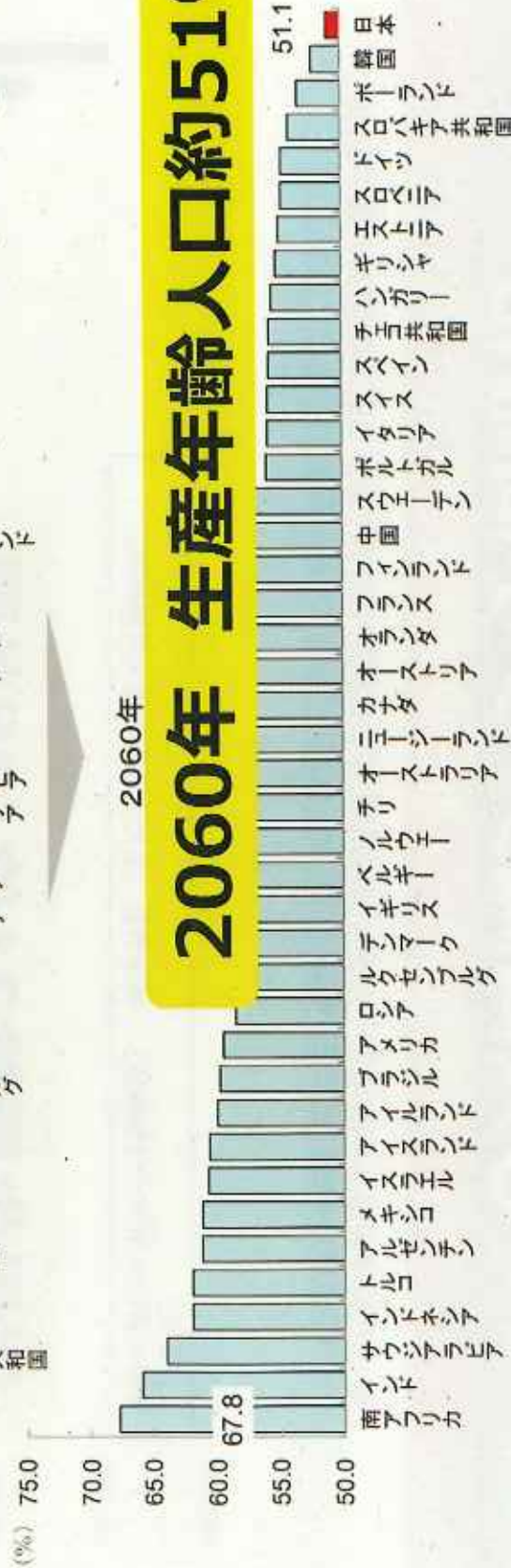
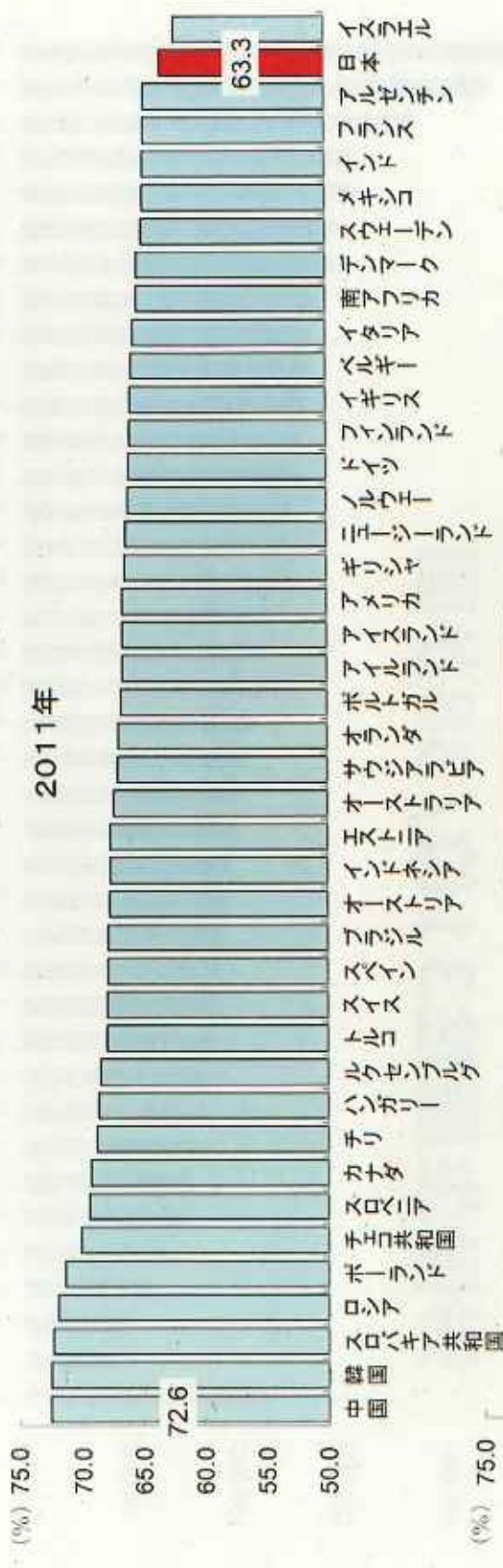
【出典】1920年～2020年：総務省統計局「人口推計」、2025年～2070年：国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（令和5年推計）」を元に作成

(出所) 文部科学省 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問) 参考資料より 以降の黄色帯は前馬が追記

①人口減少・少子高齢化

OECD加盟国の生産年齢人口の将来予測

◆ OECDの予測では、2060年には日本の生産年齢人口が51.1%にまで減少し、OECD加盟国中最下位になる。



【出典】OECD「Looking to 2060 : Long-term global growth prospects」をもとに作成
 (出所) 文部科学省 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問) 参考資料より

①人口減少・少子高齢化

OECD加盟諸国の一人当たり労働生産性（2022年）

- ◆ 2022年の日本の就業者一人当たりの労働生産性は85,329ドルであり、OECD加盟38か国中31位、米国の約54%にとどまっている。



【出典】公益財団法人日本生産性本部「労働生産性の国際比較2023」をもとに作成

(出所) 文部科学省 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問) 参考資料より

2 グローバル化

在留外国人数と訪日外国人旅行者数・出国日本人数の推移

- ◆ 2023年の在留外国人数は340万人強となり、過去最高。
- ◆ 2019年の訪日外国人旅行者数は約3200万人、出国日本人数は約2000万人となり、コロナ禍で激減したものの、2023年に急回復。

在留外国人数



訪日外国人旅行者数・出国日本人数の推移



2023年 在留外国人数過去最高

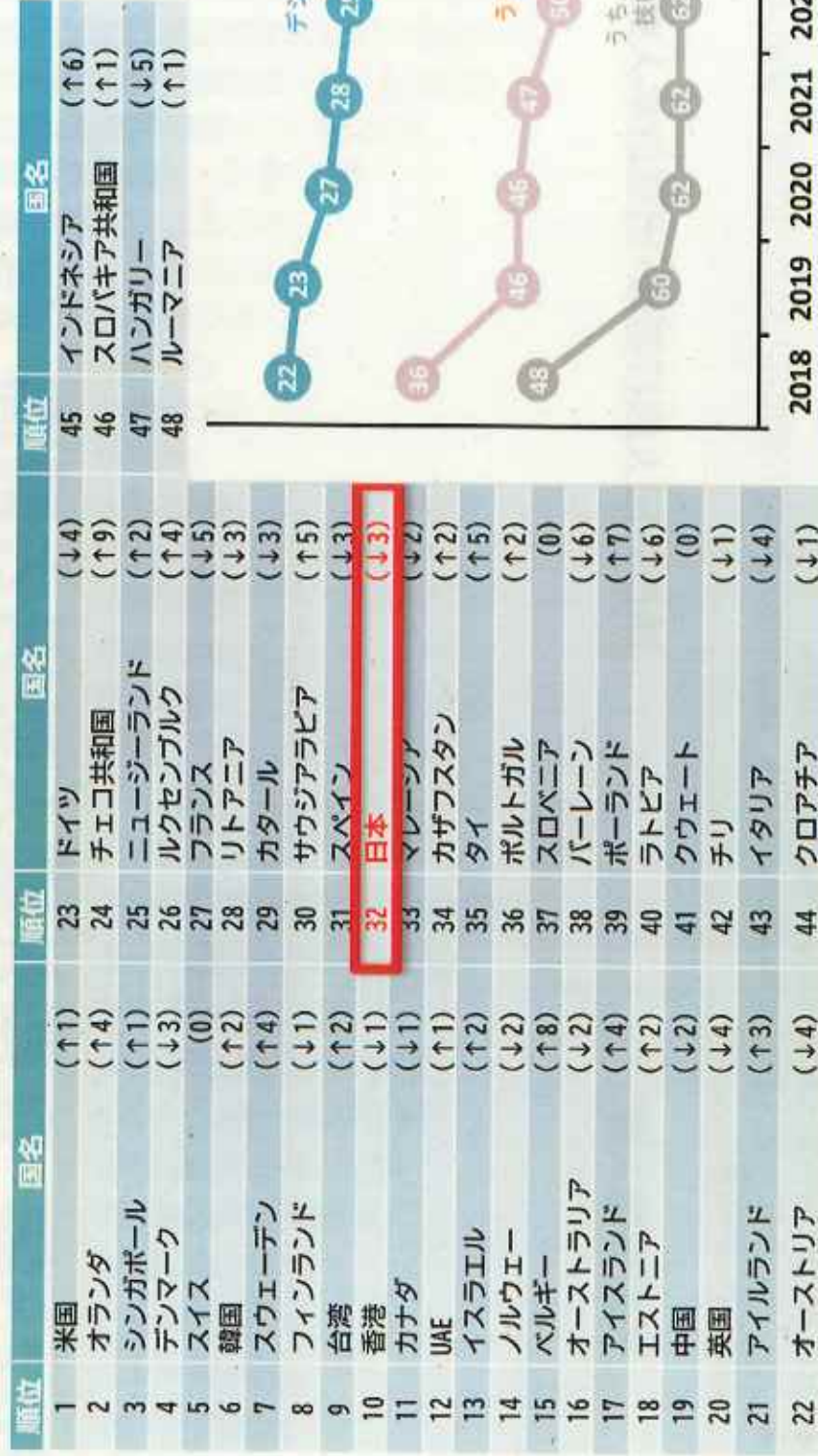
【出典】出入国在留管理庁「令和5年末現在における在留外国人数について」をもとに作成

【出典】日本政府観光局 (JNTO) 「訪日外客統計」をもとに作成
(出所) 文部科学省 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問) 参考資料より

③デジタル化

諸外国のデジタル競争力

- ◆ 日本のデジタル競争力は32位と諸外国に比べて低く、うち人材のスコアやデジタルスキルのスコアが低い。



※括弧内は前年度との比較

デジタル競争力：知識（人材（デジタル・技術スキル含む））、テクノロジー、将来に向

※1 人材：PISAの数学的リテラシーの評価、シニアマネージャーの国際経験、外国人

※2 デジタル・技術スキル：自然科学分野の卒業者の割合、科学技術雇用者の割合

【出典】IMD「World Digital Competitiveness Ranking」(2023) をもとに作成

【経年比較グラフの出典】<https://www.imd.org/centres/wcr/world-competitiveness-center/rankings/world-digital-competitiveness-ranking/>

(出所) 文部科学省 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問) 参考資料より

デジタル競争力 低い (32位)

④ 予測困難で変化が激しい時代

Volatility
(変動性)

VU

Complexity
(複雑性)

Uncertainty
(不確実性)

CA

Ambiguity
(曖昧性)

⑤人生100年時代

転職・キャリアアップについての考え方

2022年新入社員「今の会社であと何年ぐらい働くと思いますか？」

分からない

22.60%

定年まで

18.50%

10年以上

8.00%

6～10年

8.90%

4～5年

13.80%

3年以内

28.30%

何年ぐらい働く？

・3年以内

→28.3%

・10年以内

→51.0%

10年以内
51%

⑤ 人生100年時代

「上手な勉強のしかたがわからない」児童生徒は学年が上がるほど増加

「上手な勉強のしかたがわからない」
学年が上がるほど増加



小4 小5 小6 中1 中2 中3 高1 高2 高3

2022	63.1	61.8	58.5	67.9	66.4	70.4	76.5	74.1	68.3
2019	39.8	45.1	43.2	55.0	61.6	63.8	68.9	71.1	66.0
差	+23.3	+16.7	+15.3	+12.9	+4.8	+6.6	+7.6	+3.0	+2.3

【出典】ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査」(2022) をもとに作成

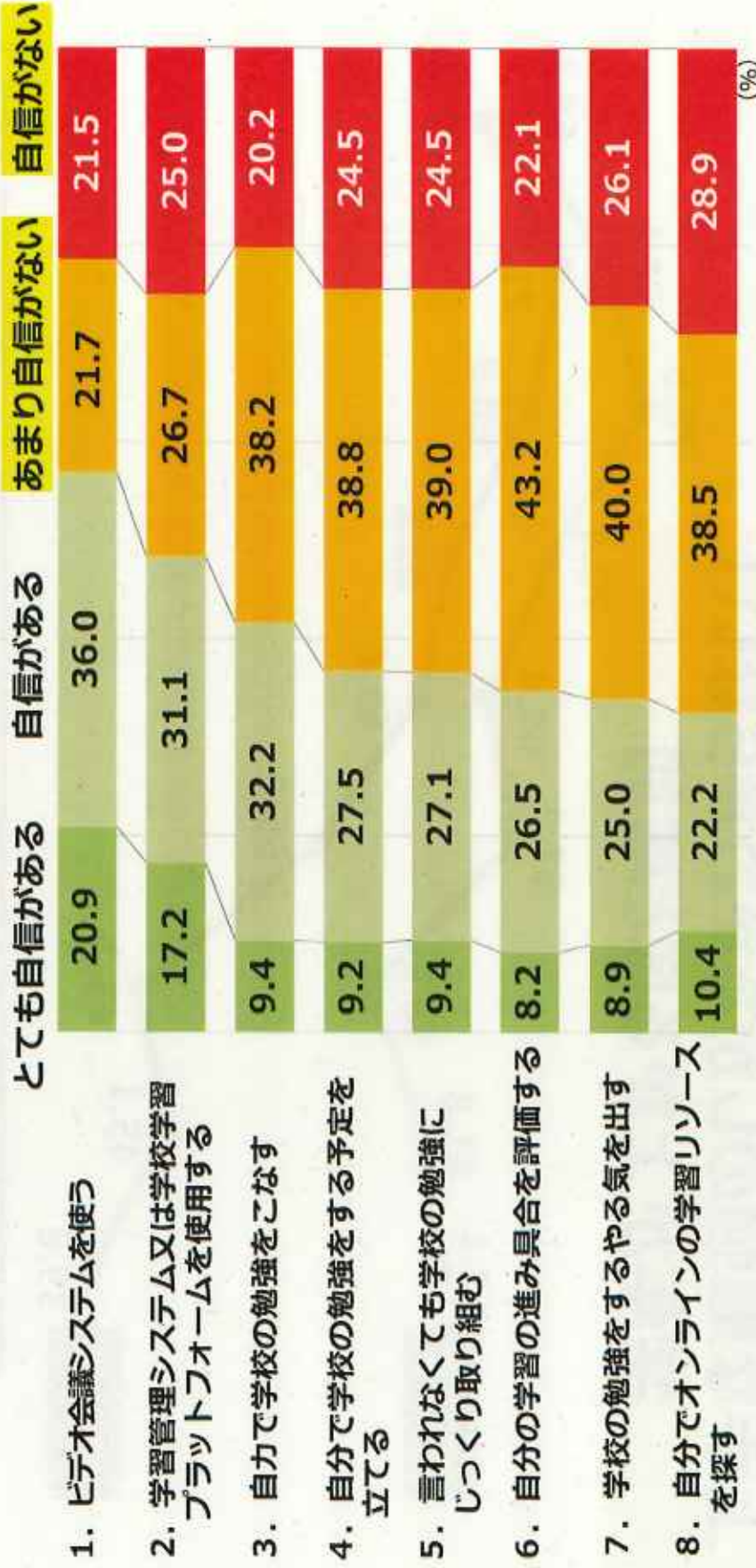
(出所) 文部科学省 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問) 参考資料より

⑤人生100年時代

自律学習を行う自信に課題

自律学習を行う 自信がない

- ◆ 学校が再び休校になった場合に自律学習を行う自信があるか、という質問に対する日本は非常に多かった。



上記8項目を指標化して比較

※OECD加盟国37か国の平均値が0.0、標準偏差が1.0となるよう標準化されており、値が大きいほど、自律学習に対する自己効力感(自信)が高い。

OECD平均	0.01
日本 (34/37位)	-0.68

⑥多様性・包摂性

小学校35人学級における多様性

「これまでどおり」で十分なのだろうか

特異な才能のある子供

※1

0.8人
(2.3%)

学習面又は行動面で著しい困難を示す子供

※2

3.6人
(10.4%)

不登校

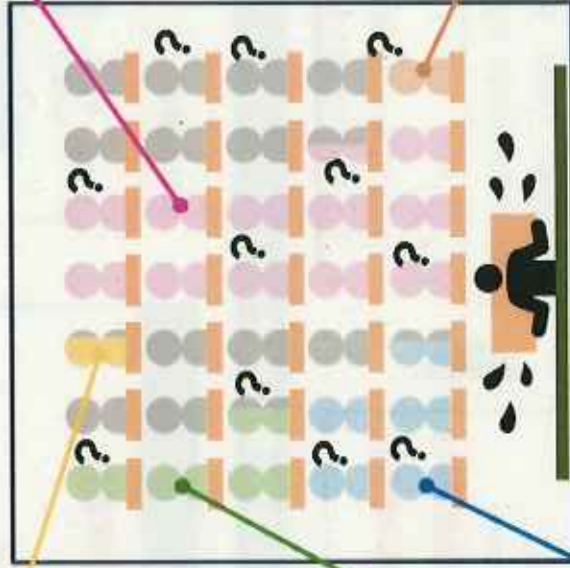
※3

0.7人
(2.1%)

不登校傾向

※4

4.1人
(11.8%)



家にいる本の冊数が

少なく学力の低い

傾向が見られる子供

※5

12.5人
(35.6%)

日本語を家で

あまり話さない子供

※6

1.0人
(2.9%)

【出典】内閣府 総合科学技術・イノベーション会議「Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策(リカージ)をベースに更新
※1 日本には定義がないため、IQ130以上を仮定し、知能指数のペリカープの正規分布を元に算出。子供の吹き出しは、文部科学省
特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議アンケートを参考に編集。
※2 文部科学省「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果(令和4年)」
※3 文部科学省「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」
※4 日本財団「不登校傾向にある子どもの実態調査(2018年12月)」
※5 文部科学省・国立教育政策研究所「令和6年度全国学力・学習状況調査」
※6 文部科学省・国立教育政策研究所「令和3年度全国学力・学習状況調査」

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して

(R3.1 中央教育審議会答申)

1. 急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力

社会背景

【急激に変化する時代】

- 社会の在り方が劇的に変わる「**Society5.0時代**」
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大など先行き不透明な「**予測困難な時代**」
- 社会全体の**デジタル化・オンライン化、DX加速の必要性**

子供たちに育むべき資質・能力

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようになることが必要

【ポイント】

- ✓ これらの資質・能力を育むためには、**新学習指導要領の着実な実施**が重要
- ✓ これからの学校教育を支える**基盤的なツールとして、ICTの活用**が必要不可欠

2. 日本型学校教育の成り立ちと成果、直面する課題と新たな動きについて

「日本型学校教育」とは？

子供たちの知・徳・体を一体で育む学校教育

- 学習機会と学力の保障
- 全人的な発達・成長の保障
- 身体的・精神的な健康の保障

【成果】

国際的にトップクラスの学力

学力の地域差の縮小

規範意識・道徳心の高さ

【今日の学校教育が直面している課題】

子供たちの多様化

生徒の学習意欲の低下

教師の長時間労働

情報化への対応の遅れ

少子化・人口減少の影響

感染症への対応

【新しい動き】

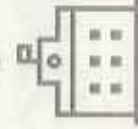


新学習指導要領の着実な実施

学校における働き方改革

GIGAスクール構想

「正解主義」や「同調圧力」への
偏りからの脱却



一人一人の子供を主語にする
学校教育の実現

「日本型学校教育」の良さを受け継ぎ、更に発展させる／
新しい時代の学校教育の実現

(出所) 文部科学省 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して (答申) 【総論解説】 (mext.go.jp) に一部強調表示を追記

【新しい動き】



新学習指導要領の着実な実施



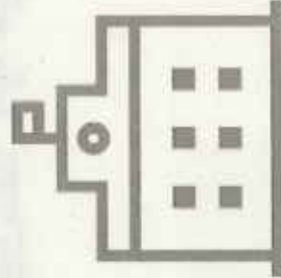
学校における働き方改革

GIGAスクール構想



「正解主義」や「同調圧力」への
偏りからの脱却

一人一人の子供を主語にする
学校教育の実現



／「日本型学校教育」の良さを受け継ぎ、更に発展させる／

新しい時代の学校教育の実現

本日の流れ

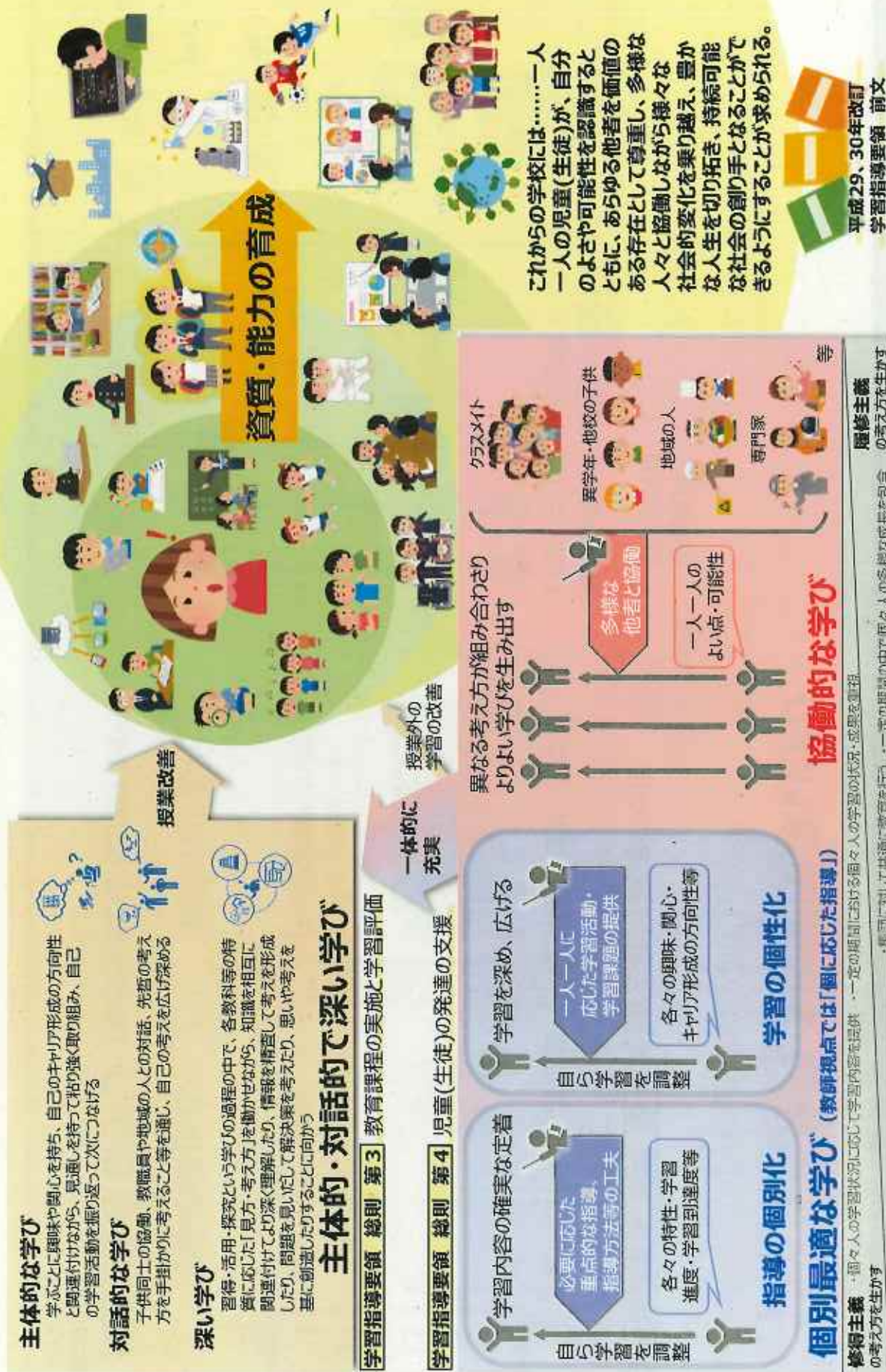
1. 教育改革の背景

2. 学習指導要領でめざす学び

3. 事例から学ぶ

4. まとめ

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実（イメージ）



※本誌刊は「教育復興委員会」における要請の定ため（令和3年1月25日由女教育復興委員会）に基づき、現状を問題化し、認識として整理したものである。

(出所) 文部科学省 (参考) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実 (イメージ) : 文部科学省 (mext.go.jp)

「個別最適化学び」と「協働的な学び」の一体的な充実（イメージ）

主体的・対話的で深い学び

学習指導要領 総則 第4 児童(生徒)の発達の支援

一体的に
充実
授業外の
学習の改善

学習内容の確実な定着

自ら学習を調整

必要に応じた
重点的な指導、
指導方法等の工夫

各々の特性・学習
進度・学習到達度等

指導の個別化

学習を深め、広げる

自ら学習を調整

一人一人に
応じた学習活動・
学習課題の提供

各々の興味・関心・
キャリア形成の方向性等

学習の個性化

個別最適化学び（教師視点では「個に応じた指導」）

修得主義
・個々人の学習状況に応じて学習内容を提供
・一定の期間における個々人の学習の状況・成果を重視
の考え方を生かす

異なる考え方が組み合わさり
よりよい学びを生み出す

多様な
他者と協働

一人一人の
よい点・可能性

協働的な学び

クラスメイト

異学年・他校の子供

地域の人

専門家

等

本日の流れ

1. 教育改革の背景
2. 学習指導要領でめざす学び
3. 事例から学ぶ
4. まとめ

事例から学ぶ

共同編集機能で進捗を見える化

出席番号順に名前を表示

出席番号	名前	進捗状況
18	アルバカ	まだゴツとした
19	アルバカ	人間がいる
20	アルバカ	煙草が濃い
21	アルバカ	すぐ近くに山
22	アルバカ	煙が多い
23	アルバカ	山
24	アルバカ	家がない
25	アルバカ	家がない

共同編集機能で進捗を見える化



一人ひとりの学習状況を把握し、個別の指導に生かす

(出所) 文部科学省 StuDX Style 共同編集機能で進捗を見える化：文部科学省 (mext.go.jp)

事例から学ぶ

振り返り活動で他者参照

授業の
理解度

振り返り
(記述)

その他
(必要に応じて)

友だちの記述が学習内容のポイントを理解するための「足場かけ」になる

出席番号順に名前を表示

振り返り

今日の授業の振り返り

「分かったこと」や「できたこと」

「分からなかったこと」や「できなかったこと」

「疑問に思ったこと」や「新たに学習してみたい問題」などを中心に書く。

手帳式と単語式の表式も前回は理解できたので、さらに難しい問題にチャレンジしたい。

式の展開について理解できたが、計算ミスが目立っていました。

手帳の公式を使った展開の仕方が分からなかった。

手帳式と単語式の両方の解き方を理解することができました。

手帳式と単語式を使って解くことができました。

手帳式の式の文字の係数の最小公倍数になるよう掛け算をし、数を減らすことができました。

手帳の式を速く手帳式の形になおして計算するやり方がわかりました。

手帳の振り返り表のため、

見つけた課題を解決するための取り組み

今後の課題を解決するために、自分で取り組むこと
(教科書やワークのページなど具体的に書く)

・ワークP33の4問目チャレンジする。

・教科書P14の例題、69頁例題、ワークP4の1で練習する。

・教科書P17の例題と練習問題を自分で練習する。

それでも分からなければ、友達や先生に聞く、理解できたら練習する。

2021-2022 学年
StuDX Style
© 2021-2022 学年 文部科学省 (mext.go.jp)

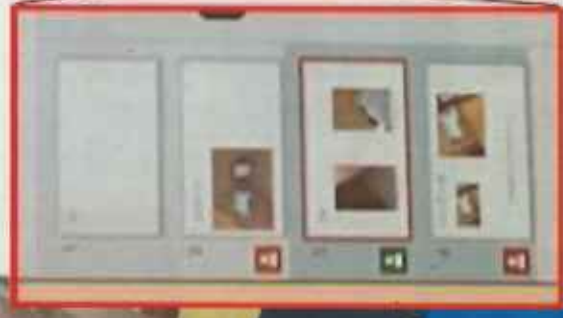
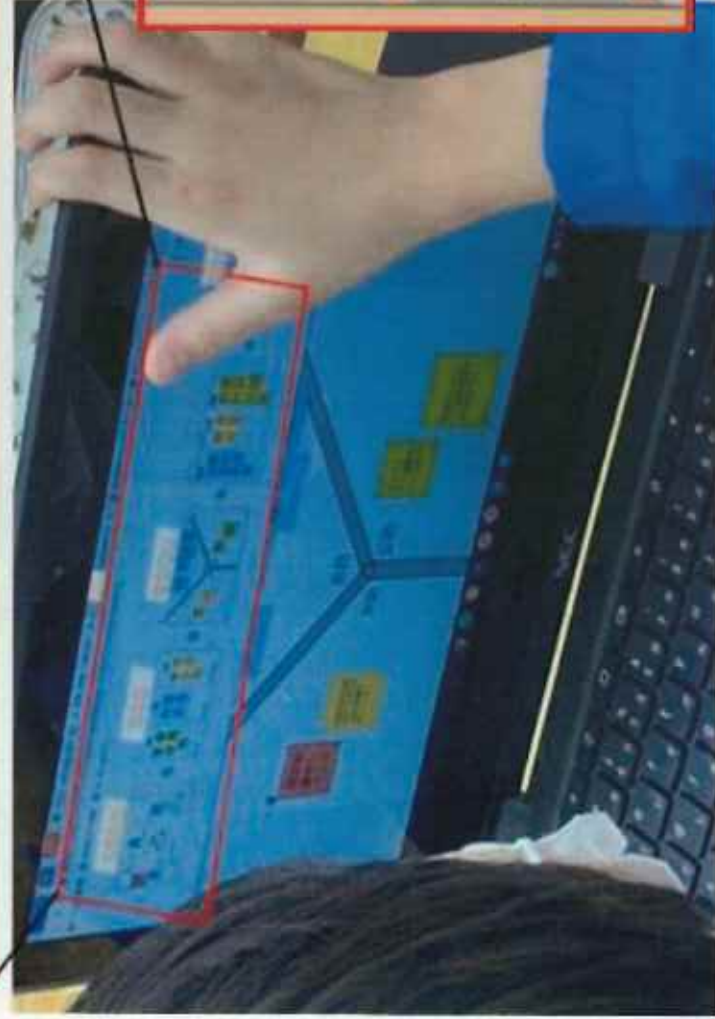


友だちの記述を参照しながら学習内容を振り返る

(出所) 文部科学省 StuDX Style 振り返り活動で相互参照：文部科学省 (mext.go.jp)

事例から学ぶ

「1人1シート」で他者参照



友だちのシートを参考に自分のシートを工夫・再検討

(出所) 文部科学省 StuDX Style [1人1シートを相互参照：文部科学省 (mext.go.jp)]

事例から学ぶ

チャット機能で情報共有



11:40

④って和紙の良さある？



火 11:41

あると思います。



11:42

いやないと思う。

さんも、良さの理由だよ。④は、紙の破れ



11:43・編集済み

理由だけど 和紙にはせんいが長いという良さを言っているんじゃない



11:49

紙はどうしても破れにくいかを書いているんだと思うよ



11:51

さんやっぱそうか ありがとう。



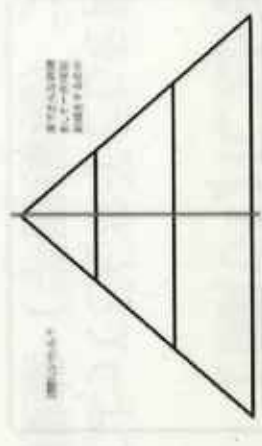
11月14日 18:19

分かったありがとうございます。



11月15日 17:23

今確認してるよー



無題のプレゼンテーション

StuDX Style



チャット上で意見や情報の共有ができる

(出所) 文部科学省 StuDX Style チャット機能で情報共有：文部科学省 (mext.go.jp)

先進自治体の実践から学ぶ



1人1台端末の効果的な活用
～個別最適な学びを支える～

特別支援教育用

特別支援教育用が
追加されました！



小学校用

中学校用

高等学校用

「マイエラスト」
小中学校用



文部科学省

標準的な機能のみ

機能面ではなく
【願い】に注目

- ・活用によってどんな子どもを育てたいか
- ・どんな授業（学習環境）づくりをしたいかなど

先進自治体の実践から学ぶ



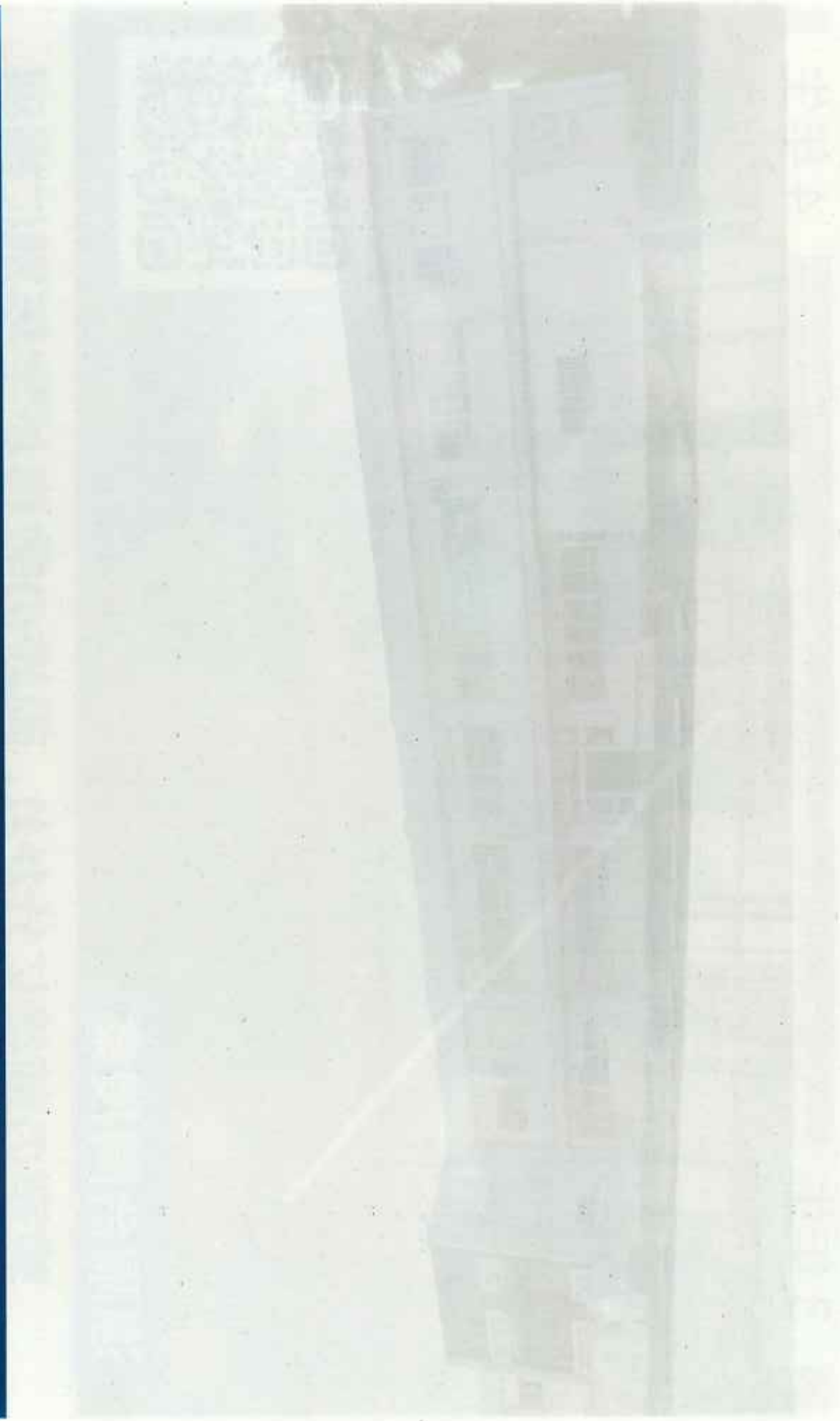
(出所) 文部科学省YouTubeチャンネル <https://youtu.be/sXsqAIUEpTU7sj=rSyVmKM6rsA-FeoQより>

先進自治体の実践から学ぶ



(出所) 文部科学省YouTubeチャンネル <https://youtu.be/Tb7ioQRr53Q?si=AOQz7179hiQigVs5より>

先進自治体の実践から学ぶ



(出所) 文部科学省YouTubeチャンネル <https://youtu.be/sXsgAIUEpTU?si=rSyVmkKM6rsA-Feo0より>

事例から学ぶ

3年生

4年生

大型提示装置



タブレットPC
(Web会議システム)

遠隔合同授業

教室の前後に分かれ、両校の教員が学年別に指導

(出所) 文部科学省YouTubeチャンネル「A1遠隔交流学习・A2遠隔合同授業ー遠隔教育事例紹介」ーより転載

事例から学ぶ

遠隔合同授業

5年生

6年生

複式学級の単式化を図る



守口市の事例から

さつき学園・6年 社会

● After the war, Japan was occupied by the Allied forces, led by the United States.

→ Japanese

English

② Let's answer the question about Japan's independence.

Main contents of the peace treaty

- Japan will recognize the independence of (A)
- Abandon Hokkaido, the Kuril Islands, the Southern Islands of Sakhalin, etc.
- We agree that the United States will administer the Amami Islands and the Ogasawara Islands.



Signing of the San Francisco Peace Treaty (1951)

① Choose the words that match the A and B in the document and write them.

(A) B()

write them

China

Okinawa

Soren

Independence.

「翻訳機能」 自分の力で進められる

two correct

守口市の事例から

9:45

寺方南小・5年 国語

授業流れ★大造じいさんとガン

(あの群れの中に一発ぶちこんで、今年こそ...!)

1:45～
1:50～
2:00～

はじめの話&自分のめあて入力

物語のまりより 思い出す

読みログ

①説明聞く

②書く(友達の参考に&質問OK)

③班で★の平均点を出す→聞きます。
～書き終わったら～

・他の人の読みログ、読むOK

・コメントしてあげるOK

・よりよく書き変えるOK

2:20～ 今日の振り返り入力

～2:30

授業の流れを示し、学びを調整できるように

守口市の事例から

樟風中・3年 理科

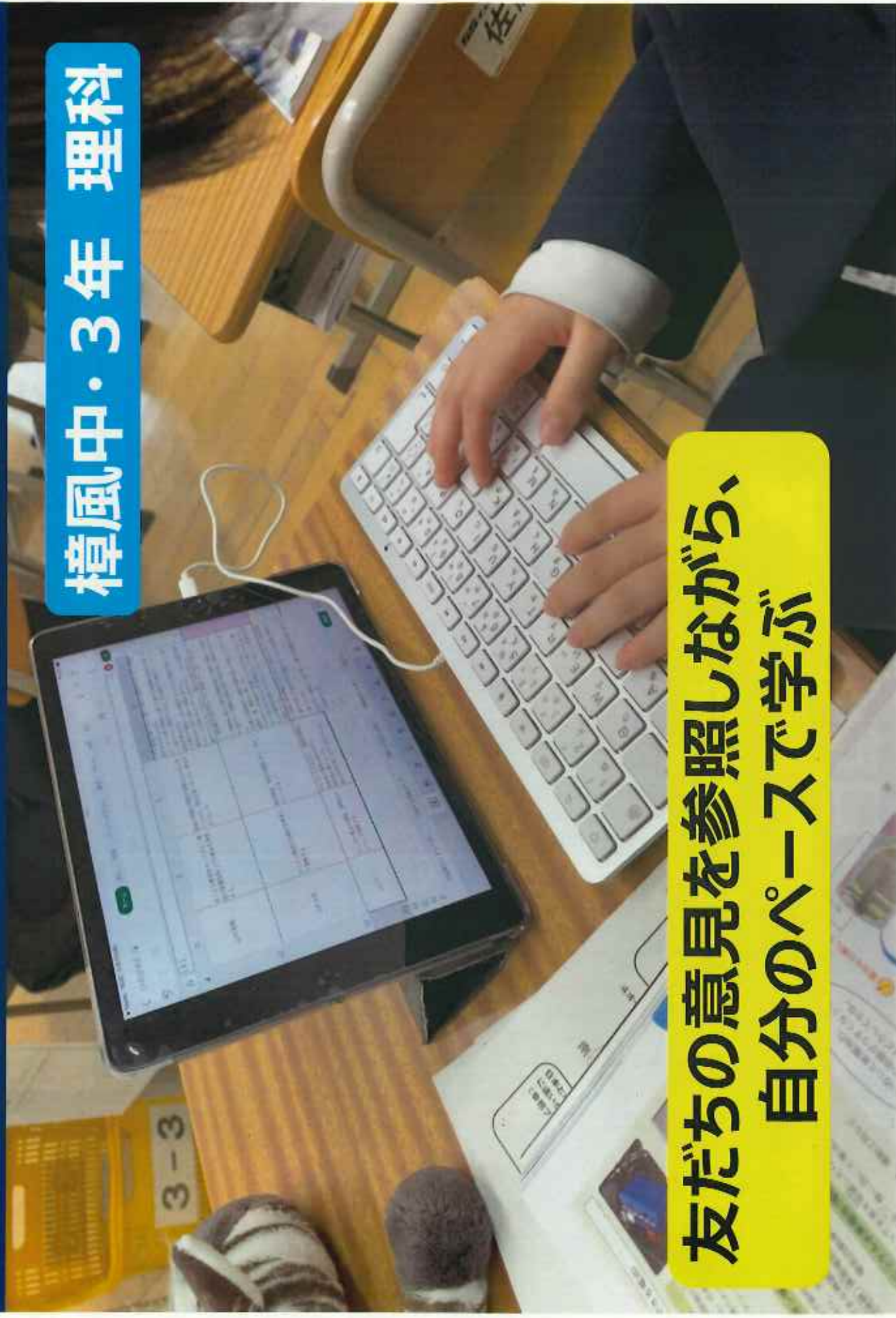
「情報の収集」 まずは、教科書から



守口市の事例から

樟風中・3年 理科

友だちの意見を参照しながら、
自分のペースで学ぶ



守口市の事例から

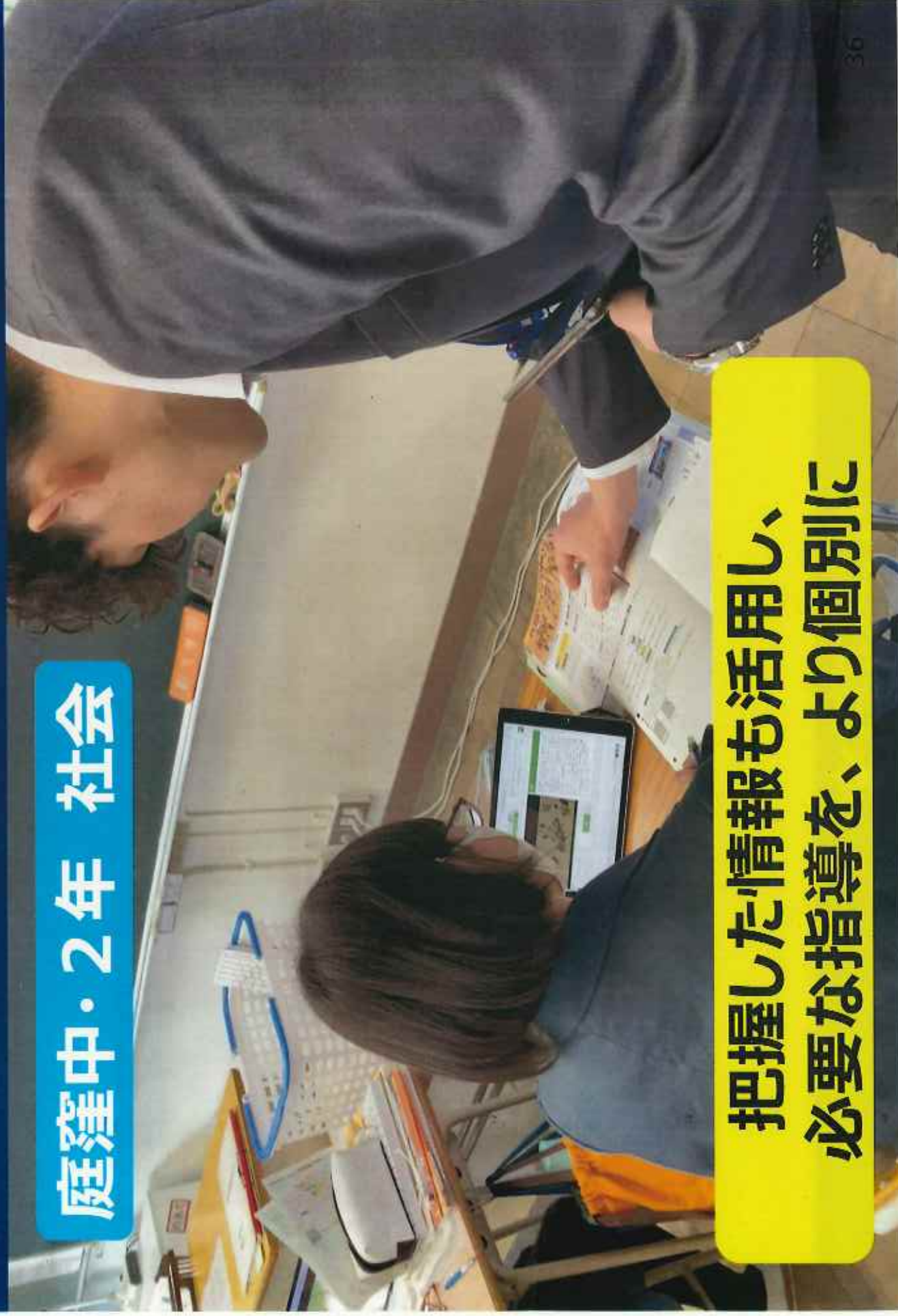
庭窪中・2年 社会

教師はクラウドで進捗を把握できる

守口市の事例から

庭窪中・2年 社会

把握した情報も活用し、
必要な指導を、より個別に



本日の流れ

1. 教育改革の背景
2. 学習指導要領でめざす学び
3. 事例から学ぶ
4. まとめ

まとめ

初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (令和6年12月25日中央教育審議会諮問)【概要】

子供たちを取り巻くこれからの社会の状況

- 不確実性の高まり(少子化・高齢化、グローバル情勢の混迷、生成AI等デジタル技術の発展等)
→子供たちは、激しい変化が止まることがない時代を生きる
- 労働市場の流動性の高まり、マルチステージの人生モデルへの転換
→自らの人生を駆取りする力を身に付けることの重要性
- 内なるグローバル化やデジタル化の負の側面等による社会の分断の芽への指摘
→多様な他者と、当事者意識を持った対話により問題を発見・解決できる「持続可能な社会の創り手」を育てる必要性
- テクノロジーは変化に伴う困難だけでなく多様な個人の思いを具現化するチャンスも生み出す
→生産年齢人口が急減する中、あらゆる資源を総動員し、全ての子供が豊かな可能性を開花できるようにすることが不可欠

顕在化している課題

- ① 主体的に学びに向かうことができていない子供の存在
 - ・ 学ぶ意義を十分に感じだせず、主体的に学びに向かうことができていない子供の増加
 - ・ 不登校児童生徒、特別支援教育の対象となる児童生徒や外国人児童生徒、特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の充実とともに、多様性を包摂し、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題
 - ・ これらに向き合うことは、「正解主義」や「同調圧力」への偏りから脱却するとともに、民主的かつ公正な社会の基盤として学校を機能させ、分断や格差の拡大を防ぎ、共生社会を実現する観点からも重要

② 学習指導要領の理念や趣旨の浸透は道半ば

- ・ 習得した知識を現実の事象と関連付けて理解すること、概念としての知識の習得や深い意味理解をすること、自分の考えを持ち、根拠を持って明確に説明すること、自律的に学ぶ自信がある生徒が少ないこと、等に依然として課題
- ・ 子供の社会参画の意識、将来の夢を持つ子供の割合等についても、改善傾向も見られるものの国際的に見て低い状況

③ デジタル学習基盤の効果的な活用

- ・ デジタル学習基盤(※)は、一人一人のよさを伸ばし、困難の克服を助ける大きな可能性を秘めているが、効果的な活用は緒に就いたばかりであり、我が国のデジタル競争力は国際比較でも低位であり、デジタル人材育成強化は喫緊の課題
- ・ 「デジタルの力でリアルな学びを支える」との基本的な考えに立ち、バランス感覚を持って、積極的に取り組む必要

(※) GIGA スクール構想による1人1台端末やクラウド環境等のデジタル学習基盤

- 子供たちが社会で活躍する2040年代を展望するとき、初等中等教育が果たすべき役割はこれまで以上に大きい
→これまでのよい部分を継承し、課題を乗り越え、高等教育との接続改善や国際的な潮流にも配慮しながら、新たな時代にふさわしい在り方を構築する必要
- 教師の努力と熱意に対して過度な依存はできず、教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合う必要性
→令和6年8月の中央教育審議会答申に基づく教員の勤務環境整備と整合させつつ、「令和の日本型学校教育」を持続可能な形で継承・発展

※ 別添図解している「多様な専門性を有する者の高い教職職能集団の形成を加速するための方策について」に係る検討と連携

まとめ

③デジタル学習基盤の効果的な活用

- デジタル学習基盤(※)は、一人一人のよさを伸ばし、困難の克服を助ける大きな可能性を秘めているが、効果的な活用は緒に就いたばかり
- 我が国のデジタル競争力は国際比較でも低位であり、デジタル人材育成強化は喫緊の課題
- 「デジタルの力でリアルな学びを支える」**との基本的な考えに立ち、バランス感覚を持って、積極的に取り組む必要

(※) GIGA スクール構想による1人1台端末やクラウド環境等のデジタル学習基盤